

市内遺跡発掘調査報告書 1

例 言

- 1 本書は平成 30 年度に岩沼市内で実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 出土品整理及び報告書作成については、2019 年1月 10 日から2月 20 日まで、岩沼市文化財整理室にて行った。
- 3 本書のトレンチ番号は現地調査時に付したものを使用した。また検出遺構の略号は以下のとおりである。
SK：土坑
- 4 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・武田裕光・太田昭夫が担当した。執筆分担については下記の通りである。
川又：第 I 章、第 II 章2～8 武田：第 II 章1（遺物以外） 太田：第 II 章1（遺物）
- 5 発掘調査の実施にあたっては、宮城県教育庁文化財課をはじめとし、各事業主・地権者の方々からご協力をいただいた。
- 6 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」（小川・竹原：1973）に拠った。
- 7 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

目 次

第 I 章 遺跡の地理的・歴史的環境	1
第 II 章 平成 30 年度の調査成果	3
1. 平等山横穴墓群	3
A. 調査に至る経緯と調査方法	
B. 調査の概要	
C. 総括	
2. 鶺鴒ヶ崎城跡（第 18 地点）	21
3. いら塚遺跡（第2地点）	23
4. 長塚遺跡（第4地点）	25
5. 丸山遺跡（第7地点）	26
6. 竹駒神社境内遺跡（第3地点）	27
7. 新館跡前遺跡（第3地点）	28
8. 鶺鴒ヶ崎城跡（第 19 地点）	29

第 I 章 遺跡の地理的・歴史的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亙理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道 4 号と同 6 号、JR 東北本線と同常磐線の合流・分岐地点であり、交通要衝の地として知られている。

縄文時代の遺跡は、岩沼西部丘陵、長岡丘陵、二木・朝日丘陵に存在する。調査が実施された遺跡は少ないが、鶉ヶ崎城跡【23】では縄文時代早期末～前期、山畑南貝塚【9】では縄文時代中期～後期、下塩ノ入遺跡【14】では縄文時代後期～晩期の土器が確認されている。

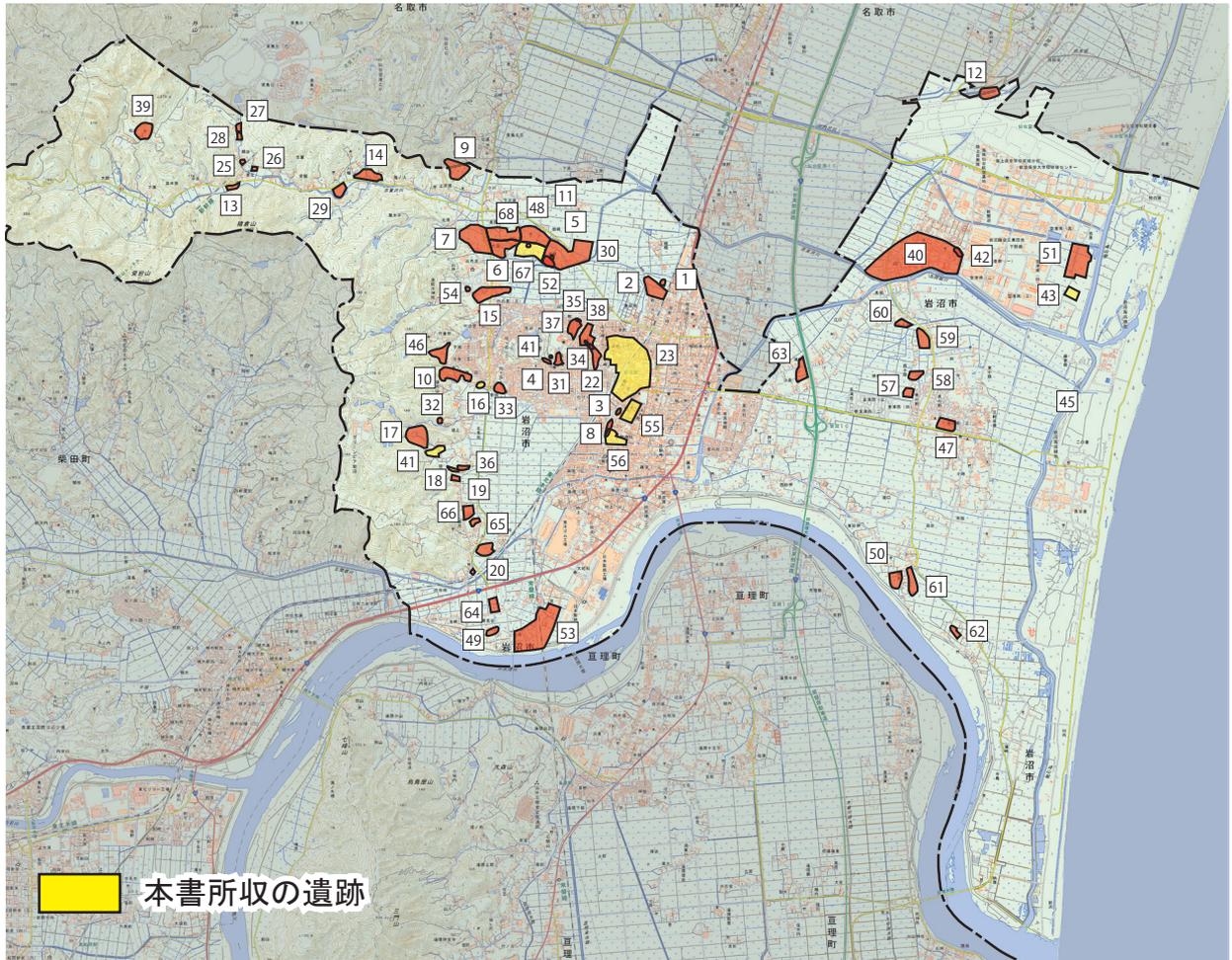
弥生時代の遺跡も調査が実施された遺跡は少ないが、鶉ヶ崎城跡では弥生時代中期後葉と考えられる竪穴建物跡を検出し、十三塚式に比定される弥生土器および石包丁等の石器が出土している。また朝日古墳群【37】では弥生時代後期の天王山式の土器が確認されている。このほか原遺跡【53】でも出土量は少ないが、石包丁や土器片が出土している。

古墳時代では集落遺跡として北原遺跡【7】、熊野遺跡【15】で前期集落が、原遺跡では後期から終末期の集落が確認されている。高塚古墳は、岩沼市史編纂事業に伴い調査を実施した県指定史跡かめ塚古墳【1】において、くびれ部付近の周溝の底面から木製鋤が出土している。横穴墓は、岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の凝灰岩層露頭面で多く造営され、丸山横穴墓群【3】、二木横穴墓群【8】、長谷寺横穴墓群【10】、引込横穴墓群【31】、土ヶ崎横穴墓群【22】などで調査が実施され、各横穴墓群から須恵器、土師器、金属製品、玉製品、人骨などが出土している。

古代の遺跡では、原遺跡の調査が近年注目を集めている。これまでの調査では掘立柱建物跡、材木堀跡、竪穴建物跡、溝跡などの遺構が発見され、また多数の土師器・須恵器などの遺物が出土している。特に 8 世紀初頭～末葉にかけて機能していた掘立柱建物跡は、建物の主軸方位が正方位を強く意識していることが判明しており、須恵器円面硯の出土と併せて『延喜式』にみえる「玉前駅家」、あるいは多賀城跡出土木簡に記載される「玉前割」が存在していた可能性が推量される。

中世の遺跡は、鶉ヶ崎城跡、朝日古墳群、上根崎遺跡【30】、朝日遺跡【38】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、丸山遺跡【55】および刈原遺跡【61】などが確認されている。このうち下野郷館跡では志賀沢川沿いで実施した調査において、在地の白石古窯跡群の製品を中心とする中世遺物を多数出土しており、中世段階の集落が河川沿いに展開している可能性が考慮されるようになった。

近世の遺跡は、現在の岩沼市の姿と大きく関係していることから多数の調査成果がある。鶉ヶ崎城跡では岩沼館主の「家中屋敷」と考えられる第 1 地点の調査が東北福祉大学によって調査が行われている。ここでは丘陵頂部の平場で南北に走方向を持つ石列と、これの西側ではほぼ併走しながら北側では東側に屈曲する溝跡が確認されている。また地鎮関連の遺構として小穴に大堀相馬焼碗を正位で埋設し、これに「かわらけ」で蓋をするように被せた状態のものが検出されている。また竹駒神社境内遺跡【56】では、礎石建物跡、掘立柱建物跡、柱列跡、通路状遺構、神事関連遺構等を検出し、近世陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、土製品、金属製品、および木製品が出土した。これまで竹駒神社の歴史は伝承や棟札、および古文書によって語られてきたが、考古学的な手法を用いたこの調査で初めて唐門の地下構造や境内の空間利用のあり方の一端を明らかにすることができた。



第1図 岩沼市遺跡地図

表 1 岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	かめ塚古墳	古墳	25	八森A遺跡		47	新田東遺跡	奈良・中世・近世
2	かめ塚西遺跡	弥生・古墳	26	八森B遺跡	縄文	48	長塚北遺跡	縄文・古墳・古代
3	丸山横穴墓群	古墳	27	銅谷A遺跡	縄文	49	南玉崎遺跡	縄文・古代
4	白山横穴墓群	古墳	28	銅谷B遺跡	縄文・近世	50	西須賀原遺跡	古代・中世・近世
5	新明塚古墳	古墳	29	新宮下遺跡	縄文・近世	51	高大瀬遺跡	古墳・古代
6	杉の内遺跡	弥生・古墳・古代	30	上根崎遺跡	縄文	52	長徳寺前遺跡	近世
7	北原遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	31	引込横穴墓群	縄文・弥生・古代・中世	53	原遺跡	古墳・古代
8	二本横穴墓群	古墳	32	古閑山遺跡	古墳	54	中ノ原遺跡	中世
9	山畑南貝塚	縄文・古代	33	新田遺跡	弥生・古墳	55	丸山遺跡	中世・近世
10	長谷寺横穴墓群	古墳	34	石垣山横穴墓群	古墳	56	竹駒神社境内遺跡	中世・近世
11	長塚古墳	古墳	35	鷲崎横穴墓群	古墳	57	新筒下遺跡	古代
12	孫兵衛谷地遺跡	古墳前	36	畑堤上貝塚	縄文・古墳・古代	58	沼前遺跡	古代
13	大日遺跡	縄文	37	朝日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	59	西土手遺跡	中世
14	下塩ノ入遺跡	縄文	38	朝日遺跡	古墳・古代・中世	60	前條遺跡	古代
15	熊野遺跡	古墳・古代	39	岩蔵寺遺跡	縄文・古代・中世	61	刈原遺跡	古代
16	平等山横穴墓群	古墳	40	下野郷館跡	古墳・古代・中世・近世	62	高原遺跡	中世
17	新館跡	中世	41	白山塚	近世?	63	上中筋遺跡	古代・中世
18	畑堤上横穴墓群	古墳	42	館外遺跡	古代	64	樋遺跡	古代・中世
19	根方泉遺跡	弥生・近世	43	にら塚遺跡	古墳・古代	65	柳遺跡	古墳・古代
20	長谷小館跡	室町	44	新館跡前遺跡	縄文・古代	66	台遺跡	縄文・弥生
22	土ヶ崎横穴墓群	古墳	45	貞山堀(木曳堀)	近世	67	長塚遺跡	縄文・古墳
23	鶴ヶ崎城跡	縄文・弥生・中世・近世	46	竹倉部遺跡	弥生・古墳・古代	68	小上潤遺跡	弥生・古墳・古代

1. 平等山横穴墓群

第Ⅱ章 平成30年度の調査成果

1. 平等山横穴墓群

A. 調査に至る経緯と調査方法

(1) 調査に至る経緯

平成30年8月に、アドレス株式会社から岩沼市教育委員会生涯学習課（以下、「市教委」と記す。）へ分譲計画に係る平等山横穴墓群とのかかわりについて照会があった。本遺跡については、志間泰治氏が昭和41年（1966）2月27日に調査しているが、詳細な報告は残っていない。市教委は、工事計画が丘陵部全体を削平するもので、本遺跡へ与える影響が極めて大きいと想定されることから、宮城県教育庁文化財課（以下、「県教委」と記す。）との協議が必要となる旨を回答した。その後、平成30年8月14日付けで、アドレス株式会社より「畑松崎分譲計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出された。県教委からの回答は、事業予定地が平等山横穴墓群の範囲に含まれているため確認調査を実施する必要があるとのことだった。続いて、平成30年9月21日付けでアドレス株式会社より埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことから、平成30年11月27日より、未開口横穴墓の有無及び本調査のための費用積算を目的とした確認調査を実施することとなった。



第2図 平等山横穴墓群地図



調査開始前の状況（南西から）



伐採作業風景（南から）



1号墓奥壁から羨道部をのぞむ（北東から）



平等山横穴墓群の遠景（南から）

1. 平等山横穴墓群

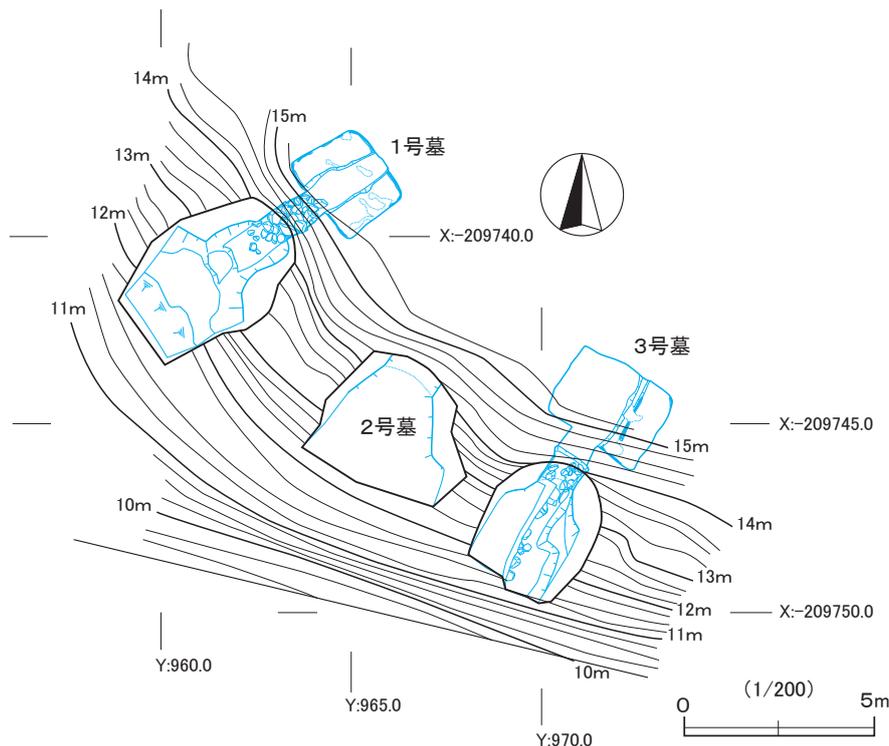
(2) 調査方法と調査経過

平成30年11月27日から平成31年2月10日まで現地調査を実施した。本調査の費用積算と、横穴墓の構造や年代観の把握を目的として、すでに確認されている横穴墓の調査と未開口横穴墓の有無を調査した。すでに確認されている3基の横穴墓は、西側から1号墓、2号墓、3号墓として、1号墓と3号墓の発掘調査を行い、2号墓は略測に止めた。また、丘陵頂部の遺跡の有無を把握するため、長方形の細長い調査区（以下、「トレンチ」と記す。）を設定した。

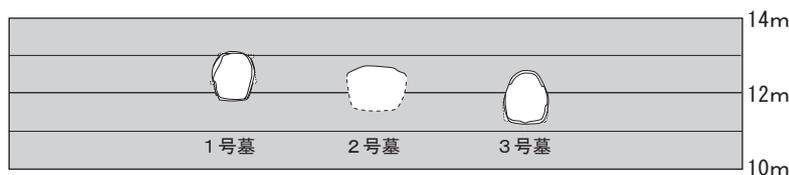
調査はまず、人力で下草刈りを行い、開口している3基の横穴墓とその周辺を調査した。次に、1号墓の調査に入り、前庭部を4つの小区画（以下、「グリッド」と記す。）に分けて土層確認用の畔（以下、「ベルト」と記す。）を設定して精査を実施した。併せて、土層断面や全景の写真撮影、土層断面図や横穴墓の存在する丘陵南側斜面の測量等を行った。前庭部の調査に続き、羨道、玄門、玄室の調査に移行した。羨道、玄門、玄室はグリッドに分けて堆積土を回収した。その後、平面図と玄門側、左右側壁、奥壁の断面図を作成した。回収した堆積土は水洗選別を実施し、遺物を回収した。

また、3号墓についても1号墓と並行して調査を行ったが、本調査の費用積算の目的に鑑み、前庭部は完掘せずに半截に止めた。

丘陵頂部は、東からAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチを設定し、Aトレンチから順に表土を取り除いた。精査の終了後、トレンチ全景写真を撮影し、土層断面図やトレンチ位置の測量を行った。

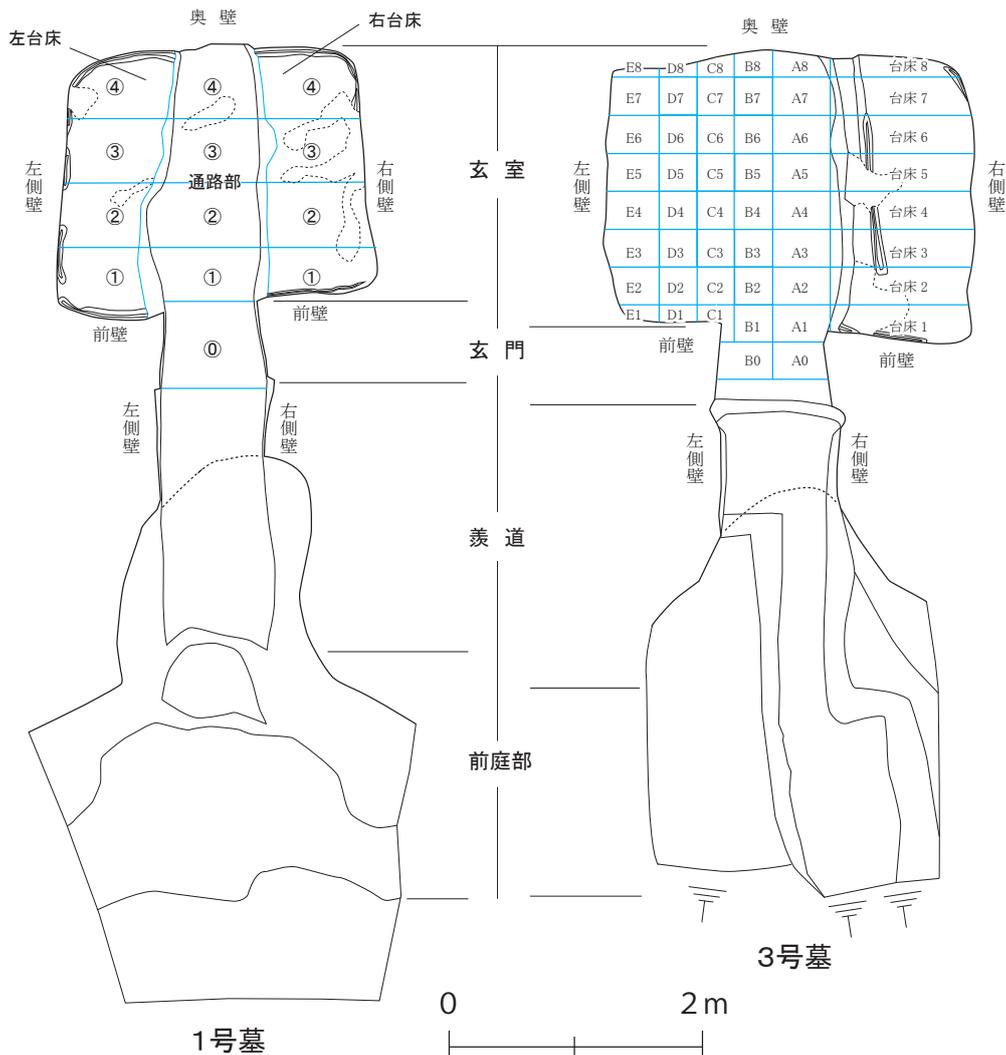


第3図 平等山横穴墓群平面分布



第4図 平等山横穴墓群垂直分布図

1. 平等山横穴墓群



第5図 平等山横穴墓の部位名称・1・3号墓玄室グリッド図

B. 調査の概要

(1) 1号墓

貝化石を含み、鮮新世後期の大年寺層に対比される山下層と呼ばれる凝灰質細粒砂岩、凝灰質シルト岩の丘陵斜面に、半円形の羨道部が確認された。前庭部、羨道部、玄門、玄室が遺存する横穴墓である。羨道部入口は少なくとも数十年前から開口しており、玄室は農作物の保存庫やごみ置き場として利用されていた。羨道部堆積土から須恵器片が出土している。また、玄門から口縁部を打ち欠いた須恵器の塊が出土した。さらに玄室内から金銅製耳環や切子玉、白玉、小玉などが出土した。

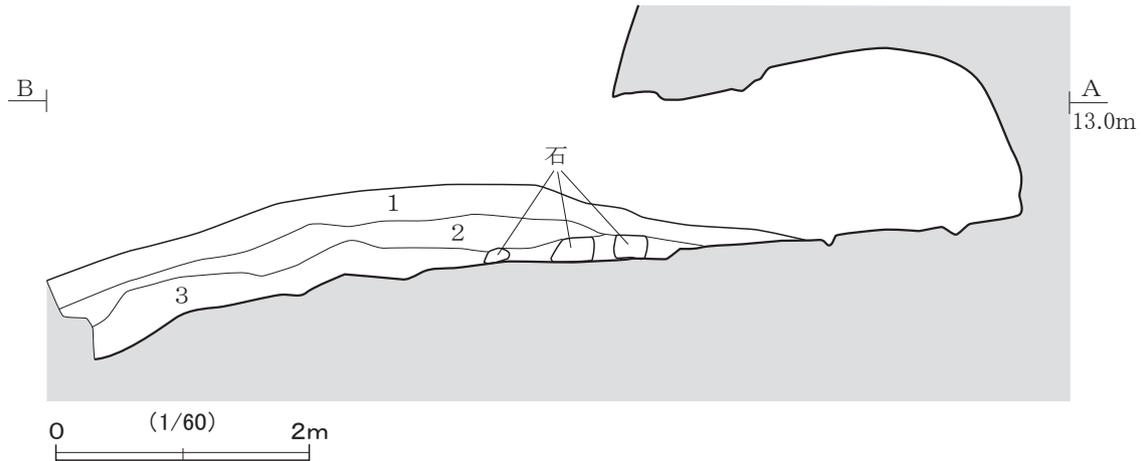
【位置】 調査区西寄り。3基の横穴墓のうち、最も西側に位置し、東に2号墓がある。玄室床面の標高：12.2m。

【堆積土】 3層。自然堆積。

【全長】 6.8m

【玄室】 規模：奥行 204cm。奥壁幅 228cm、前壁幅 252cm。最大高 148cm、奥壁高 120cm、前壁高 132cm。

平面形：やや横に長い方形。右側壁がわずかに内側に張り出す。



1号墓 土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	表土。ビニール・ガラスなどを含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまり弱い。ガラス片などを少量含む。
3	褐色	(10YR4/4)	シルト	しまり極めて強い。凝灰岩粒をやや多く含む。



1号墓検出状況 (南西から)



1号墓前庭部の土層断面 (南から)

第6図 1号墓土層断面図

形態：左右無縁台床付き両袖型。玄門部との境界は明瞭である。

立面形：ドーム形。

横断面形：半円形。

右台床：奥行196cm、奥壁側幅76cm、前壁側幅84cm、底面からの高さ16～28cm。平面形は長方形を呈する。

左台床：奥行216cm、奥壁側幅84cm、前壁側幅68cm、底面からの高さ16～32cm。平面形は長方形を呈するが、玄門側がやや崩れている。

排水溝：両台床とも奥壁際、側壁際、前壁際に上幅4～8cm、深さ4cm程の排水溝が巡っている。

工具痕：主に奥壁と前壁および両側壁の下半に、幅4cm程で縦方向に残存。壁面上半並びに天井部は風化により判別不能。

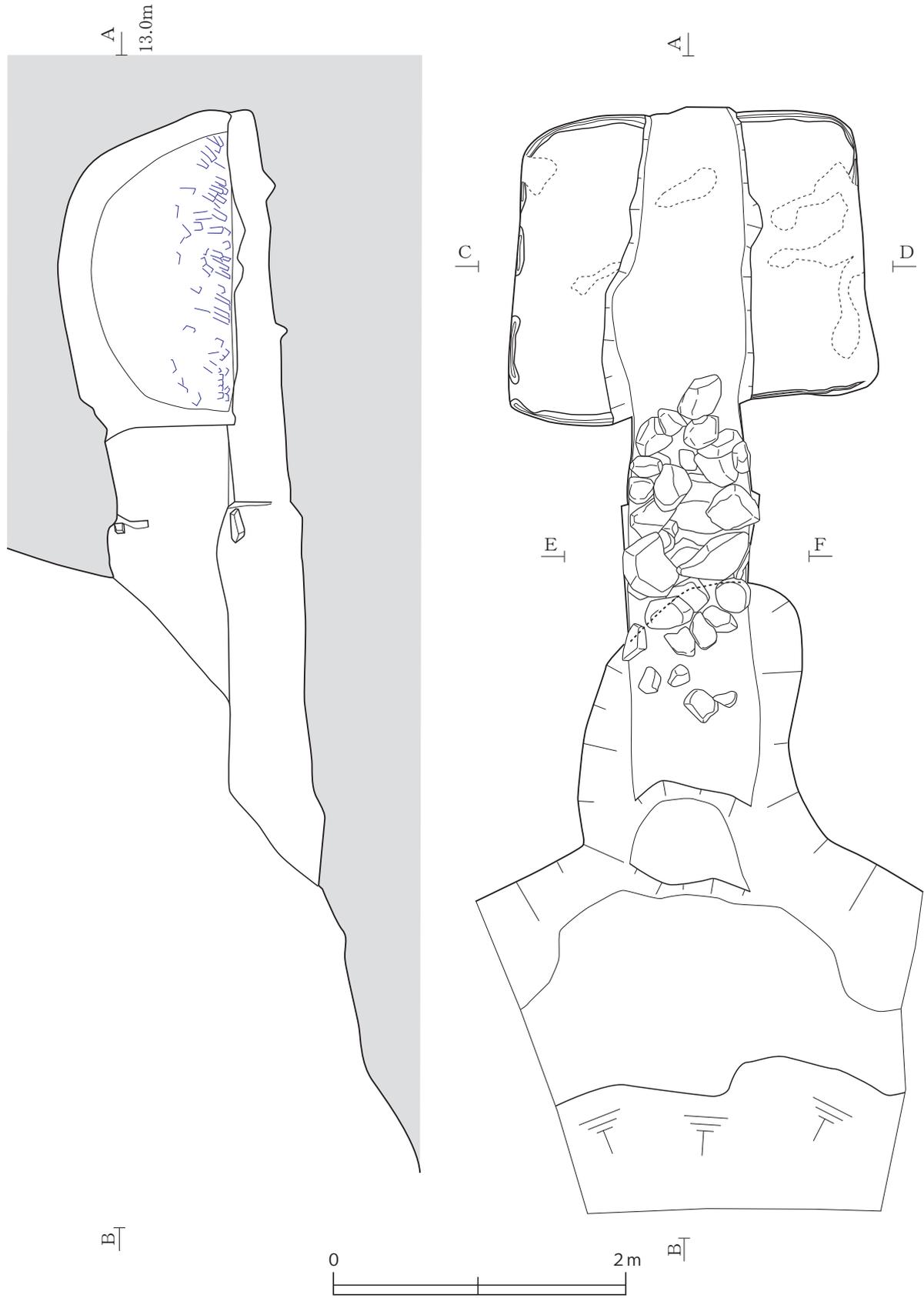
【玄門】 規模：奥行60cm。玄室側幅88cm、羨道側幅100cm。玄室側高120cm、羨道側高124cm。

平面形：方形。玄室側がやや窄まる。

形態：平坦形。

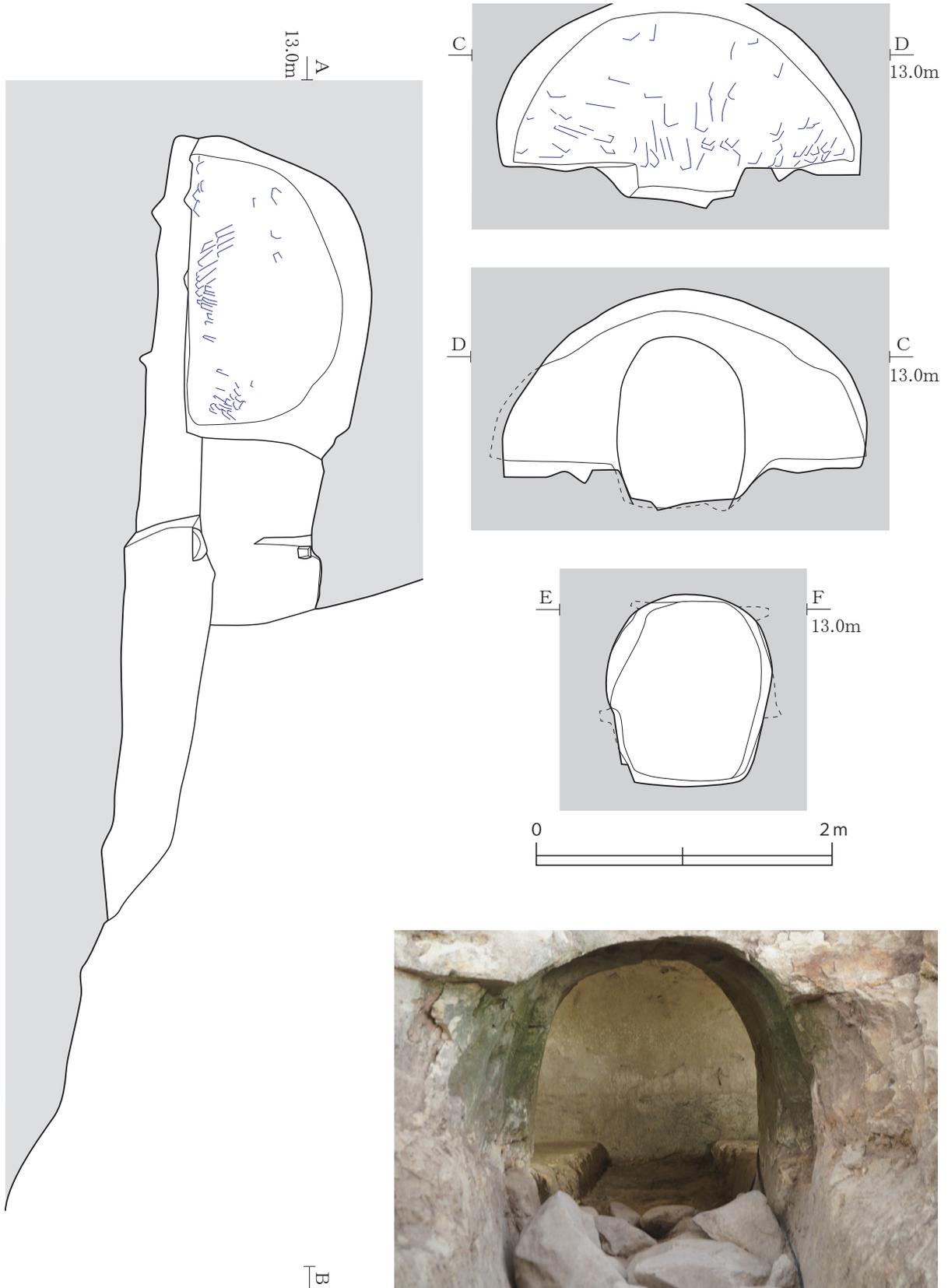
立面形：アーチ形。

1. 平等山横穴墓群



第7図 1号墓平面図・断面図・側面図

1. 平等山横穴墓群



1号墓全景（南西から）

1. 平等山横穴墓群

【羨道】 規模：奥行96cm。玄門側幅112cm、入口側幅84cm。玄門側高132cm、入口側高132cm。玄門との境を10cm程の段が巡っている。玄門前壁に設置する板扉などの押さえとして、閉塞に用いられたものと考えられる。

平面形：長方形。比較的平坦に造り出されている。

立面形：アーチ形。

閉塞石：長さ16～56cmの礫が玄門から羨道の底面に33個残存。特に閉塞溝周辺に多く重なっている。

付属施設：側壁に門穴が残存している。左側壁は、床面から44cmの位置に、残存幅26cm、高さ10cm、奥行12cmの門穴が残存する。また、その上部で床面から122cmの位置に、残存幅8cm、高さ8cm、奥行8cmの門穴が残存する。右側壁は、床面から48cmの位置に、残存幅24cm、高さ10cm、奥行12cmの門穴が残存する。また、その上部で床面から120cmの位置に、残存幅8cm、高さ10cm、奥行10cmの門穴が残存する。玄門前壁に設置する板扉などの押さえとして、閉塞に用いられたものと考えられる。

【遺物】 玄室がすでに開口していたことから遺物の量は少なく、また遺物の遺存状況は悪いが、玄室内から玉類、鞆尻、鉄鏃が、玄門から須恵器、玉類が、羨道部から前庭部にかけては須恵器が出土している。これらの中で図示できたのは須恵器3点、玉類23点、金属製品4点である。

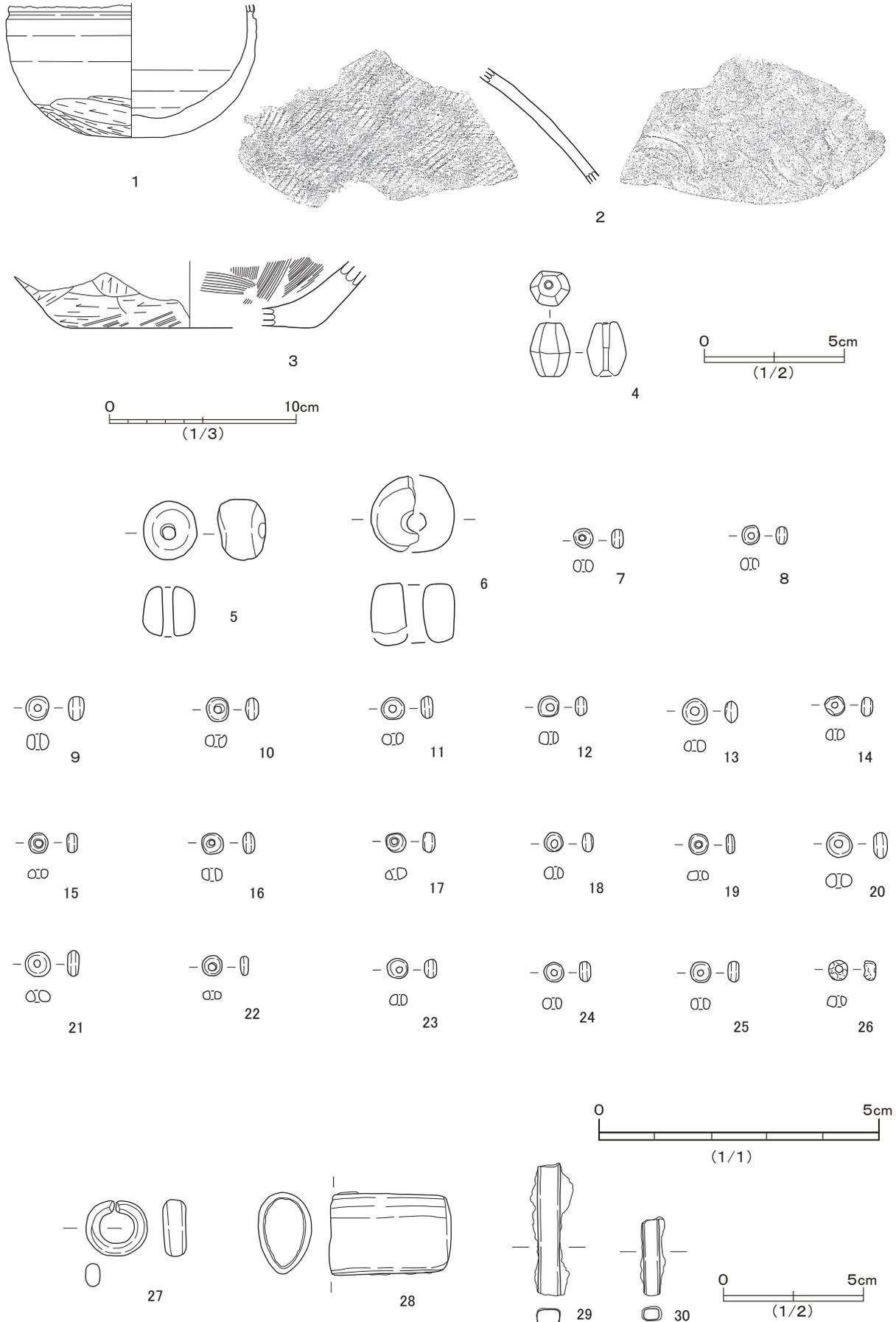
須恵器 玄門から出土した壺(第8図1)は体部が内弯気味に立ち上がるもので、底部は平底風丸底のものである。体部外面には1条の沈線が巡っており、その直上の同じ高さで欠損していることから故意に打ち割られた可能性も考えられる。羨道部から出土した甕(第8図2)は外面が平行タタキ目成形で、内面にはアテ目が認められる。

玉類 切子玉1点、白玉2点、小玉20点で、切子玉は水晶製、白玉はガラス製と琥珀製、小玉はガラス製17点、滑石製が3点である。小玉は全て水洗選別により検出されたもので、大きさは径が0.32～0.45cm、厚さが0.15～0.28cm、孔径が0.1～0.15cmである。

金属製品 耳環は金銅製で、保存状態が良く表面の鍍金が全面に残っていた。刀装具の鞆尻は銅製で、内面には鞆の木質部が付着している。

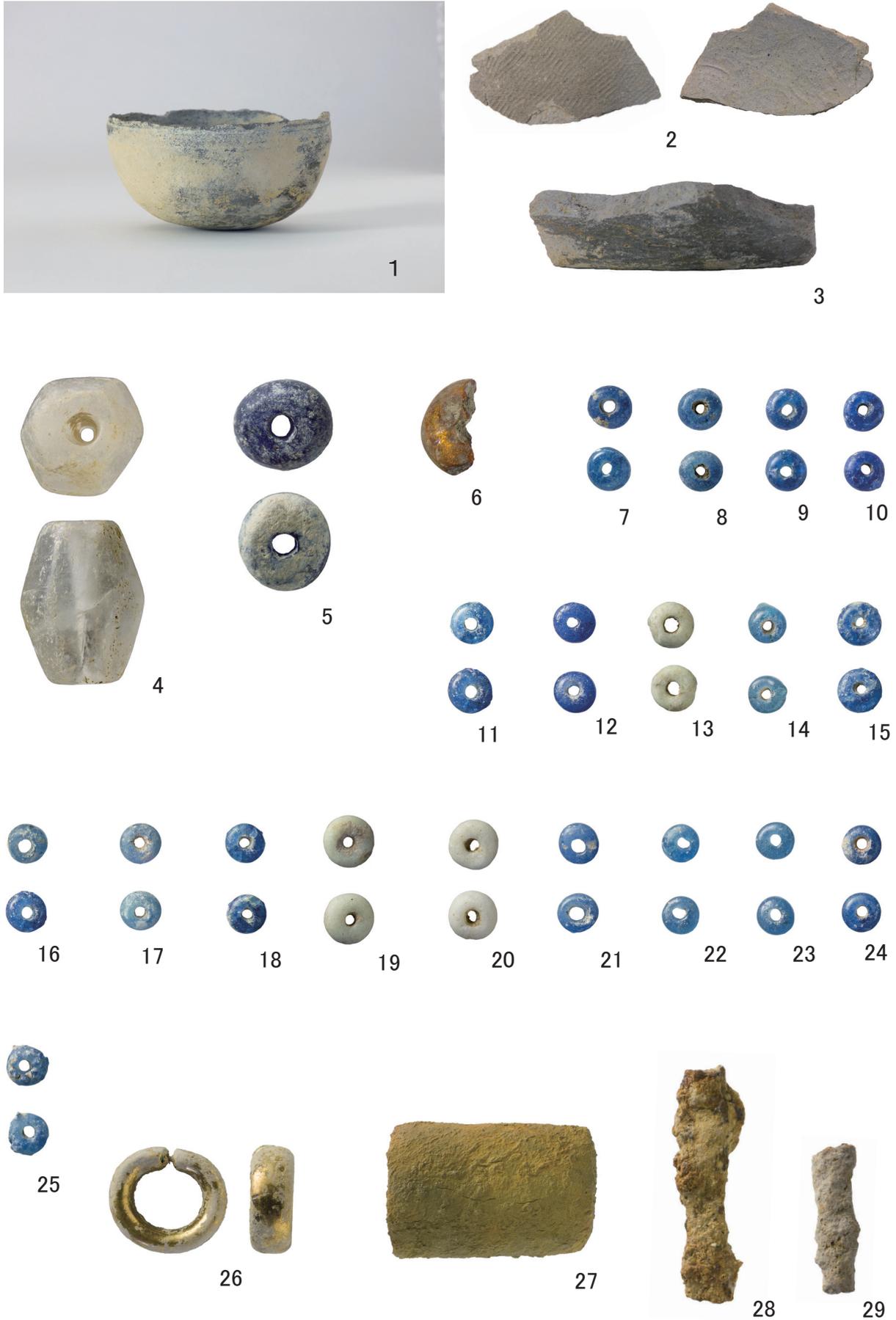
以上の遺物の中で1号墓の年代が推量される数少ない資料が須恵器壺である。これは体部外面に沈線を施す平底風丸底のもので、銅碗などの金属器模倣の土器とされているものに類似している。類例としては大崎市川北横穴墓群B地区4号墓から出土した土師器壺などがある(高橋:1971、大崎市:2009)。これは体部外面に2条の沈線、口縁部内面に1条の沈線が巡るもので、本例とは大きさがほぼ同じである。実はこの土師器と同じく4号墓の羨道部床面からは銅碗が出土している。これは外面に2条一組の沈線が2帯に施されているもので、その特徴や大きさがほぼ同じことから上記の土師器はこの銅碗を模倣して製作されたものと考えられている。また、銅碗の年代については7世紀後半の第3四半期頃に位置づけられている。これら銅碗、土師器とは種類は異なるものの、本例も特徴から7世紀後半頃のものと考えられる。1号墓ではこの資料が玄門からほぼ原位置を保って出土しており、このことから1号墓については7世紀後半頃を中心とした使用年代が推定される。

1. 平等山横穴墓群



第8図 1号墓遺物実測図

1. 平等山横穴墓群



写真図版1 1号墓出土遺物

1. 平等山横穴墓群

1号墓 出土遺物観察表

番号	種別	出土地区・層位	特徴	法量 (cm)	残存	写真 図版
1	須恵器 埴	玄門	平底風丸底で、底部は分厚い。外面には1条の沈線が巡る。内外面ロクロナデ後、外面底部のみ手持ちヘラケズリ。	体径 13.4、器高 (7.1)	口縁部 欠損	1-1
2	須恵器 甕	東西ベルト下	外面：平行タタキ目、ロクロナデ 内面：同心円状のアテ目		体部上 半破片	1-2
3	須恵器 甕か瓶類	羨道部	外面：平行タタキ目、ヘラケズリ 内面：ヘラナデ、ナデ	底径 13.2	底部 1/5	1-3
4	玉類 切子玉	中央0 玄門	水晶製。長さ 1.9、最大幅 1.4、最小幅 0.8、孔径 0.2～0.3		完存	1-4
5	玉類 白玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.9、厚さ 0.9、孔径 0.2		完存	1-5
6	玉類 白玉	中央1	琥珀製。長さ推定 1.4、厚さ推定 1.1、孔径推定 0.3		半欠	1-6
7	玉類 小玉	左1 台床	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-7
8	玉類 小玉	左1 台床	ガラス製。長さ 0.32、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-8
9	玉類 小玉	中央0 玄門	ガラス製。長さ 0.4、厚さ 0.28、孔径 0.1		完存	1-9
10	玉類 小玉	中央0 玄門	ガラス製。長さ 0.4、厚さ 0.22、孔径 0.1		完存	1-10
11	玉類 小玉	中央0 玄門	ガラス製。長さ 0.4、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-11
12	玉類 小玉	中央0 玄門	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-12
13	玉類 小玉	中央0 玄門	滑石製。長さ 0.4、厚さ 0.2、孔径 0.12		完存	1-13
14	玉類 小玉	中央0 玄門	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-14
15	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.15、孔径 0.15		破損	
16	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.4、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-15
17	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-16
18	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-17
19	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.17、孔径 0.1		完存	1-18
20	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	滑石製。長さ 0.45、厚さ 0.25、孔径 0.1		完存	1-19
21	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	滑石製。長さ 0.45、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-20
22	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.15、孔径 0.12		完存	1-21
23	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.33、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-22
24	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-23
25	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.35、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-24
26	玉類 小玉	中央1 玄室内通路	ガラス製。長さ 0.37、厚さ 0.2、孔径 0.1		完存	1-25
27	金属製品 耳環	中央0 玄門	金銅製。長さ 2.2、幅 2.0、厚さ (断面) 0.8×0.5		完存	1-26
28	金属製品 鞆尻	中央1 玄室内通路	銅製。断面倒卵形。内部に鞆の木質部残存。長さ 4.3、幅 2.9×1.9、厚さ 0.2		鞆尻 のみ	1-27
29	金属製品 鉄鏃	中央1 玄室内通路	鉄製。頸部の一部か。断面長方形。長さ (4.7)、最大幅 0.8、最小幅 0.5		一部	1-28
30	金属製品 鉄鏃	中央1 玄室内通路	鉄製。茎部の一部か。断面長方形。長さ (2.7)、最大幅 0.5、最小幅 0.4		一部	1-29

1. 平等山横穴墓群

(2) 2号墓

貝化石を含み、鮮新世後期の大年寺層に対比される山下層と呼ばれる凝灰質細粒砂岩、凝灰質シルト岩の斜面から羨道部の一部が確認された。今回の調査では精査をせず、略測のみに止めている。

【位置】 調査区中央。3基の開口している横穴墓の中央に位置し、西に1号墓、東に3号墓がある。

【玄室】 平面形：方形。

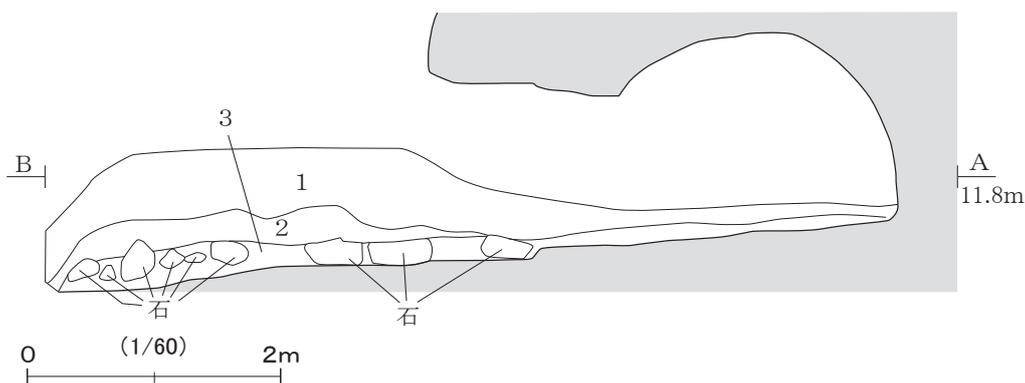
形態：両袖型。堆積土のため、規模や横断面形、台床の有無等については不明。

立面形：ドーム形。

(3) 3号墓

貝化石を含み、鮮新世後期の大年寺層に対比される山下層と呼ばれる凝灰質細粒砂岩、凝灰質シルト岩の斜面から半円形の羨道部が確認された。前庭部、羨道部、玄門、玄室が遺存する横穴墓である。羨道部入口は少なくとも数十年前から開口しており、玄室は農作物の保存庫やごみ置き場として利用されていた。玄室内から須恵器、土師器、石製品が出土した。また、羨道部から須恵器が出土している。

【位置】 調査区東寄り。3基の開口している横穴墓のうち、もっとも東側に位置し、西に2号墓がある。玄



3号墓 土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	シルト	表土。ビニール・缶・ガラスなどを含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまり弱い。ブリキ・ガラス片などを含む。土師器甕出土。
3	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	しまり極めて強い。閉塞に用いた安山岩塊・凝灰岩小片を含む。



3号墓検出状況（南から）



3号墓前庭部の土層断面（南東から）

第9図 3号墓土層断面

1. 平等山横穴墓群

室床面の標高は11.3～11.5m。玄室手前から奥に向かってやや傾斜する。

【堆積土】3層。自然堆積。

【全長】6.8m

【玄室】規模：奥行224cm。奥壁幅272cm、前壁幅276cm。最大高164cm、奥壁高128cm、前壁高132cm。

平面形：やや横長の方形。

形態：右有縁台床付き両袖型。玄門部との境界は明瞭である。

立面形：ドーム形。

横断面形：半円形。

右台床：奥行228cm、奥壁側幅104cm、前壁側幅104cm、底面からの高さ40～60cm。平面形はやや不整な長方形を呈し、玄門側と中央の有縁部が崩落している。

排水溝：前壁際、側壁際に一部残存。また、有縁部と台床の縁に沿って上幅5cm、深さ5cm程の排水溝が巡っている。

工具痕：奥壁と前壁および両側壁の下半に幅1～6cm程で縦方向に残存。壁面上半並びに天井部は風化により判別不能。玄室左奥壁に炭化物付着。

【玄門】規模：奥行60cm。玄室側幅100cm、羨道側幅112cm。玄室側高124cm、羨道側高132cm。

平面形：台形。右側壁がやや内側に入り込む。

形態：平坦形。

立面形：アーチ形。

【羨道】規模：奥行108cm。玄門側幅116cm、入口側幅96cm。玄門側高144cm、入口側高152cm。玄門との境を8cm程の段が巡っている。玄門前壁に設置する板扉などの押さえとして、閉塞に用いられたものと考えられる。

平面形：長方形。比較的平坦に造り出されている。

立面形：アーチ形。

閉塞石：長さ18～50cmの礫が羨道から前庭部の底面に18個程残存。特に玄門前壁の閉塞溝周辺に多く重なっている。

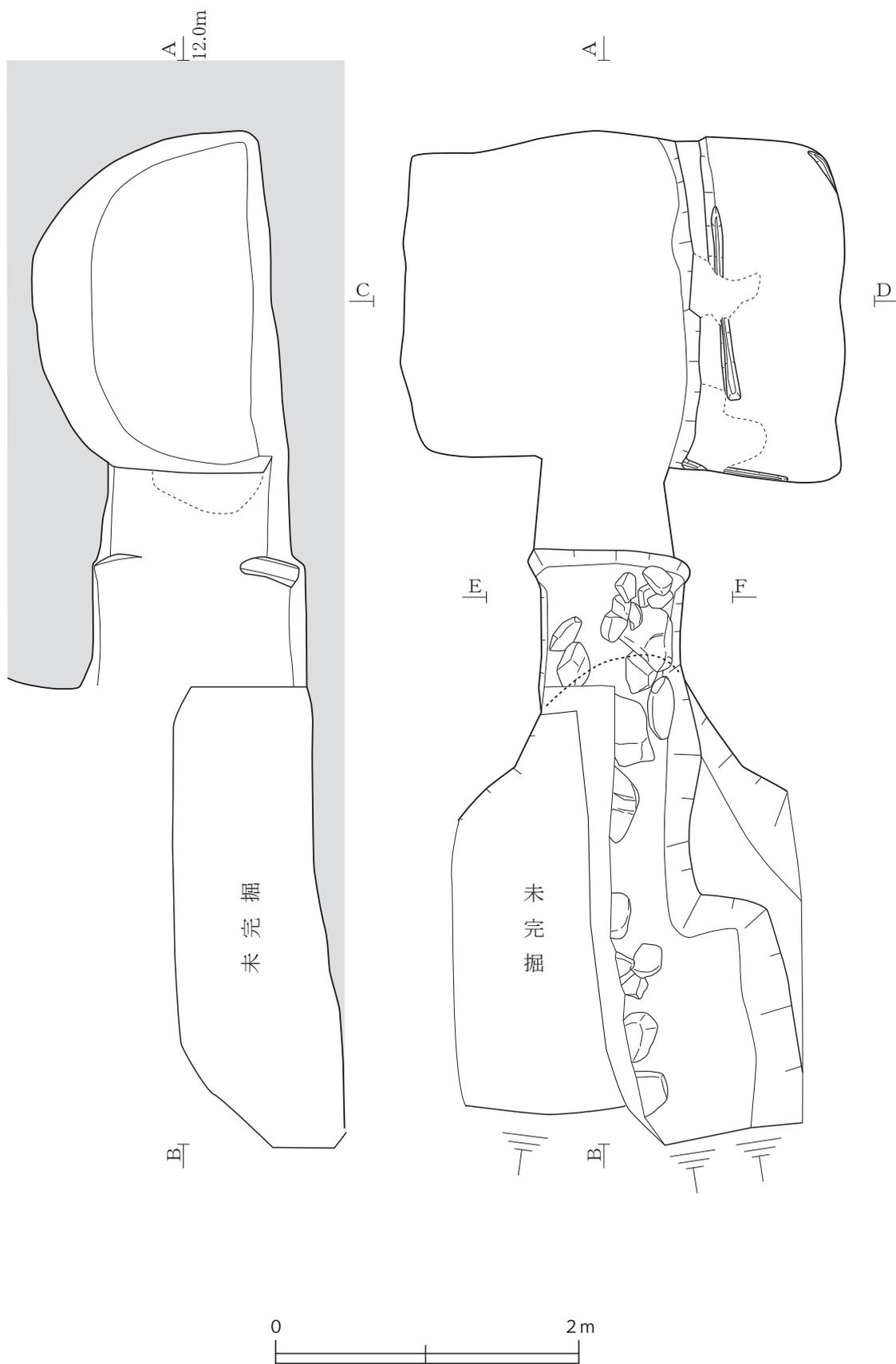
付属施設：玄門前壁手前の左右側壁下部が、20cm程掘り込まれている。玄門前壁に設置する板扉などの押さえとして、閉塞に用いられたものと考えられる。

【遺物】玄室がすでに開口していたことから遺物の量は少なく、また遺物の遺存状況は悪いが、玄室内から須恵器・土師器と石製品が、羨道部から須恵器が出土している。これらの中で図示できたのは須恵器3点、土師器1点、石製品2点である。

須恵器 瓶類(第11図1)は羨道部から出土したもので、底部が丸底で体部上半に沈線が巡っている。甕の可能性も考えられる。この資料と同一個体の破片が1号墓の羨道部から前庭部にかけて出土している。第11図2・3は横瓶の同一個体の体部上半破片とみられ、外面には格子タタキ目、内面には同心円状のアテ目が認められる。

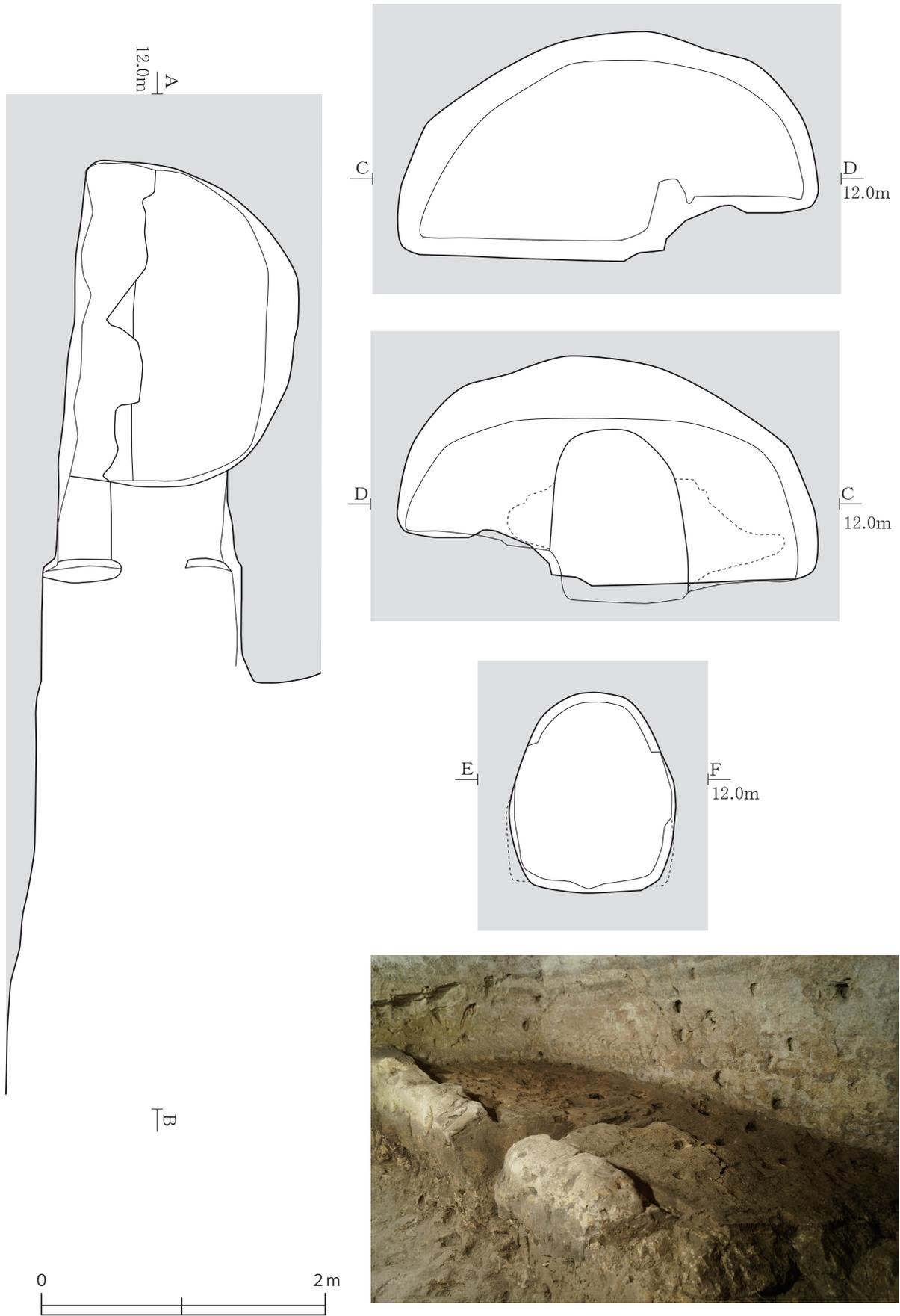
土師器 玄室と羨道部の上層から甕の破片が出土している。これはロクロで製作されており、形態的にも平安時代の時期のものと考えられる。開口後に持ち込まれたか流入したもので、横穴墓には関わらない遺物と考えられる。

1. 平等山横穴墓群



第10図 3号墓平面図・断面図・側面図

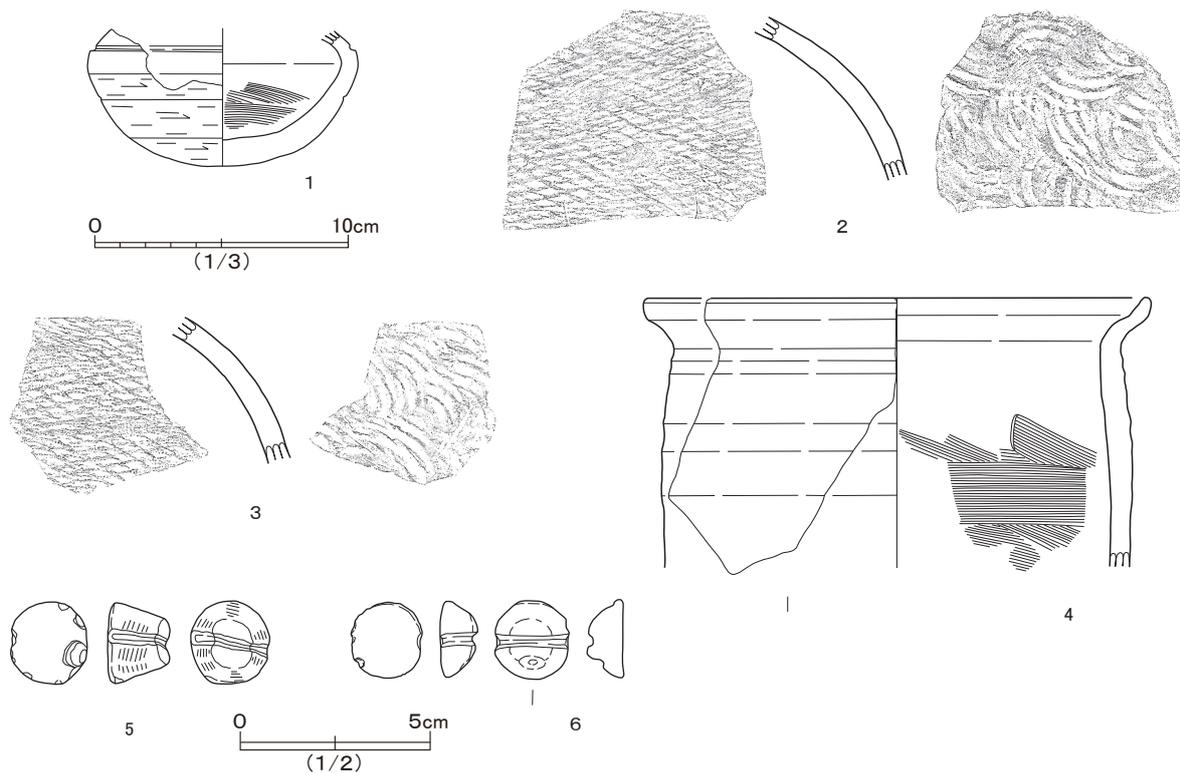
1. 平等山横穴墓群



3号墓の台床（南西から）

第II章 平成30年度の調査成果

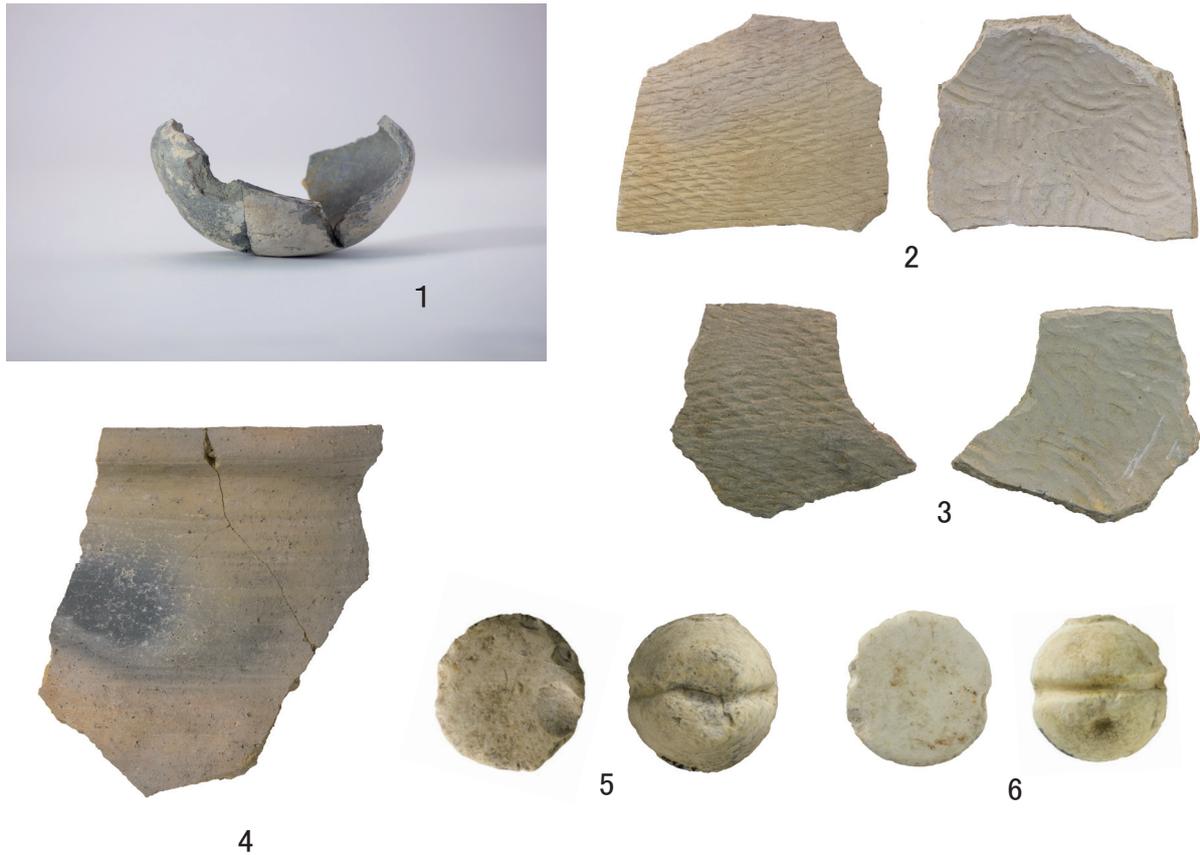
1. 平等山横穴墓群



第11図 3号墓遺物実測図

3号墓 出土遺物観察表

番号	種別	出土地区・層位	特徴	法量 (cm)	残存	写真 図版
1	須恵器 瓶類	羨道部、1号墓前庭 ～羨道部北西	丸底で、底部が分厚い。外面には1 条の沈線が巡る。内外面ロクロナデ 後、外面回転ヘラケズリ、内面ユビ ナデ。	体径 10.7、器高 (5.5)	体部 上半～ 口縁部 欠損	2- 1
2	須恵器 横瓶	羨道部	外面：格子タタキ目 内面：同心円状のアテ目		体部上 半破片	2- 2
3	須恵器 横瓶	C 1 玄室上層	外面：格子タタキ目 内面：同心円状のアテ目		体部上 半破片	2- 3
4	土師器 甕	C 4 玄室、羨道部	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、ヘラナデ	口径推定 20.1	口縁部 ～体部 上半 1/8	2- 4
5	石製品 不明	B 4 玄室	滑石製。円錐台状。側面から上面にかけて1状の溝が 彫り込まれている。長さ1.6、最大幅2.2、最小幅1.2		完存	2- 5
6	石製品 不明	B 6 玄室	滑石製。半球状。側面から上面にかけて1条の溝が彫り込ま れている。その片側に1個の盲孔あり。長さ1.6、最大幅2.2、 最小幅1.3		完存	2- 6



写真図版2 3号墓出土遺物

石製品 乳白色の滑石を加工して製作された石製品が2点、玄室内から出土した。両方とも一面が平坦面で、凸部の方に溝や盲孔を施している。

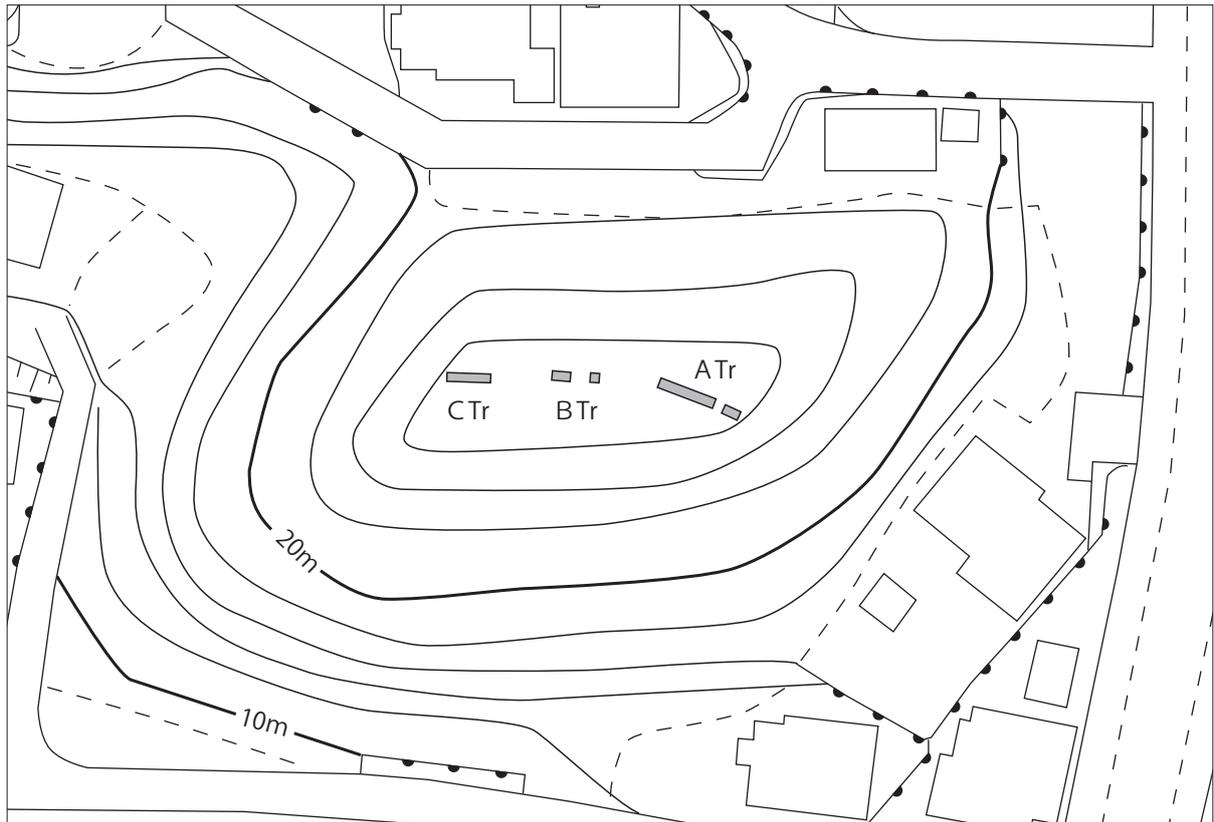
3号墓の年代については資料が少なく不明な点が多いが、羨道部から甕の可能性のある須恵器瓶類や須恵器横瓶が出土していることから、7世紀代を中心とした使用年代が推定される。

(4) 頂上部トレンチ

横穴墓の所在する丘陵の頂部に3本のトレンチを設定した。丘陵頂部には3筋の高まりが見られ、東の高まりから順にAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチとした。Aトレンチ、Bトレンチについては、最大60cm程下の岩盤直上まで掘り下げたが、遺構、遺物ともに確認できなかった。Cトレンチでは、岩盤直上のシルト層上面まで掘り下げ、さらに一部サブトレンチを設定し、岩盤直上まで掘り下げたが、遺構は確認できなかった。表土より弥生土器片が出土している。

【遺物】 表土から弥生土器とみられる破片が少量出土している。そのなかで図示できたのは蓋とみられる土器が1点である。これはつまみ部の一部で、体部から口縁部にかけて大きく広がる器形のものかと推量される。器面の保存が悪く、地文などは確認できなかった。そのほかの破片は深鉢の一部とみられ、その中に細か

1. 平等山横穴墓群



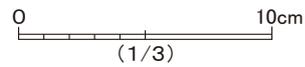
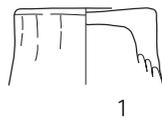
第12図 頂上部トレンチ配置図 (1/800)



Aトレンチ (東から)

Bトレンチ (西から)

Cトレンチ (西から)



第13図 頂上部出土遺物実測図

頂上部 出土遺物観察表

番号	種別	出土地区・層位	特徴	法量 (cm)	残存	写真 図版
1	弥生土器 蓋?	西トレンチ 表土	保存状況が悪く、辛うじてケズリの跡が確認できる。	底径 5.6	つまみ部 1/2	3-1



写真図版3 頂上部出土遺物

1. 平等山横穴墓群

な撚糸文(R)の地文が確認された。なお、本横穴墓群では以前に丘陵斜面から縄文土器と土師器が採集されている(岩沼市史編纂委員会:2015)。

C. まとめ

本横穴墓群は、岩沼西部丘陵から東に延びる二木・朝日丘陵と呼ばれる低丘陵の南西斜面に位置する。二木・朝日丘陵には他にも、丸山横穴墓群、二木横穴墓群、土ヶ崎横穴墓群、引込横穴墓群、長谷寺横穴墓群などがあり、特に長谷寺横穴墓群は、本横穴墓群と近接して存在することから、一連の横穴墓群の可能性もある(岩沼市史編纂委員会2015)。長谷寺横穴墓群では、玄室平面が片袖型や、玄門の位置が左右どちらかのコーナーに寄る形状も見られるが、主体は両袖型で方形の形状である。また、玄室立面は全てドーム形を呈し、付帯施設は有縁台床、無縁台床、コの字形台床、造り付け石棺が見られる。岩沼市内の他の横穴墓群を見ても、玄室平面が両袖型で方形を呈し、玄室立面がドーム形であるものが大部分を占め、付帯施設の設置位置も玄室右側が最も多く、次に左右両側が多い。

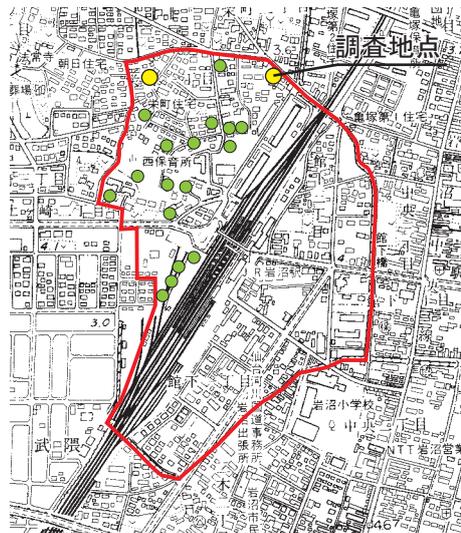
本横穴墓群の各横穴墓の玄室平面は両袖型で方形を呈し、玄室立面はドーム形である。1号墓は、左右側壁に無縁台床が付帯している。3号墓は、右側壁に有縁台床を付帯しており、本横穴墓群は市内横穴墓群の主要な傾向に位置付けられる。

本横穴墓群の造営年代について1号墓は、玄門床面からほぼ原位置を保っていると考えられる須恵器壙が出土しており、その年代観から7世紀後半頃を中心とした使用年代が推定される。3号墓は羨道部から礎の可能性のある須恵器瓶類や須恵器横瓶の破片が出土しており、その年代観から7世紀代を中心とした使用年代が推定される。玉前駅家・割の地と推定される原遺跡の近年の調査成果により、これらの造墓集団については官衙的な施設の造営・維持の役割を担った人々の関与が考えられる(岩沼市史編纂委員会2018)。なお、以上の結果を踏まえ、事業者側との調整を現在進めている。

2. 鶺鴒ヶ崎城跡（第18地点）

2. 鶺鴒ヶ崎城跡（第18地点）

対象地は鶺鴒ヶ崎城跡内に位置する。地質学的には自然堤防、もしくは後背湿地にかけて立地する。遺跡内では平成16年に3地点で発掘調査が実施されているほか、個人住宅新築工事に際して確認調査等が実施され、これまでに中世の遺構・遺物、近世の区画溝等などの遺構のほか、17～19世紀後半にかけての遺物が出土している。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館并館下絵図』（宮城県図書館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、「下中屋敷」として描かれている。



第14図 鶺鴒ヶ崎城跡位置図

平成30年8月1日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表面下約7.3mの柱状改良工事を行うとあるが、近隣で実施した発掘調査では現地表面から80～120cm下で遺構が確認できる状況であり、これらの成果を踏まえると遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は平成30年8月28日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西4m、南北2mのトレンチを設定し、重機を用いて現地表面下60cmで確認されたV層上面までを掘削した。確認できた土層は以下のとおりである。

- I層 表土。既存住宅建築時の盛土。厚さ30cm。
- II層 暗褐色シルト（10YR3/3）厚さ15cm。
- III層 黒褐色シルト（10YR3/2）厚さ5～10cm。
- IV層 にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）厚さ15cm。遺構確認面。整地層。
- V層 暗褐色シルト（10YR3/3）自然堤防形成層。

調査ではV層上面で遺構精査を実施し、III層を掘り込む土坑3基を確認した。

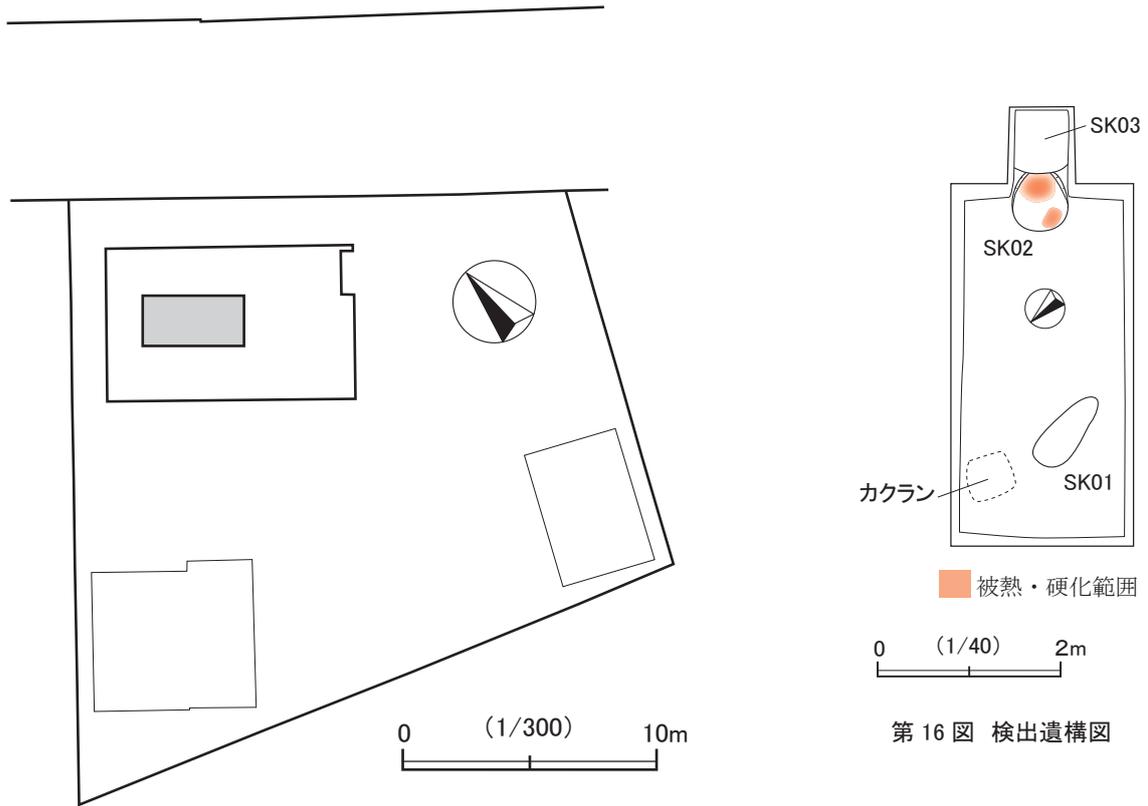
SK01 調査区南側に位置する土坑で長軸110cm、短軸30cm、深さ15cmを測る。堆積土は黒褐色シルト・暗褐色シルトなど3層に分層でき、すべて人為的埋土である。遺物は出土していない。

SK02 調査区東側に位置する土坑で、東側をSK03によって失う。また、西側の遺構壁面は掘削時に失うが、確認できた範囲では長軸80cm、短軸30cm、深さ20cmを測る。堆積土は1層で、炭化物をやや多く、凝灰岩粒を少量含む黒褐色シルトによって人為的に埋られている。残存していた遺構壁面は強い被熱によって赤変している。底面には薄い炭層が遺存し、その直下も被熱によって硬化している。遺物は出土していない。

SK03 調査区東側に位置する土坑で、西側でSK02と重複し、これより新しい。東側は調査区外へ展開するため、全体形状は不明であるが、確認できた範囲では深さは35cmで、凝灰岩粒を多量含む黒褐色シルトによって人為的に埋られている。遺物は出土していない。

このほか、遺物は表土～III層中から近世陶器・近現代陶磁器の小片がごく少量出土している。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



第15図 トレンチ位置図

第16図 検出遺構図



調査区全景 (西から)

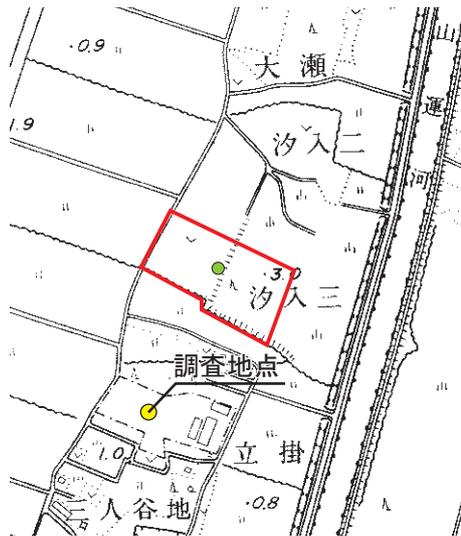
3. いら塚遺跡（第2地点）

3. いら塚遺跡（第2地点）

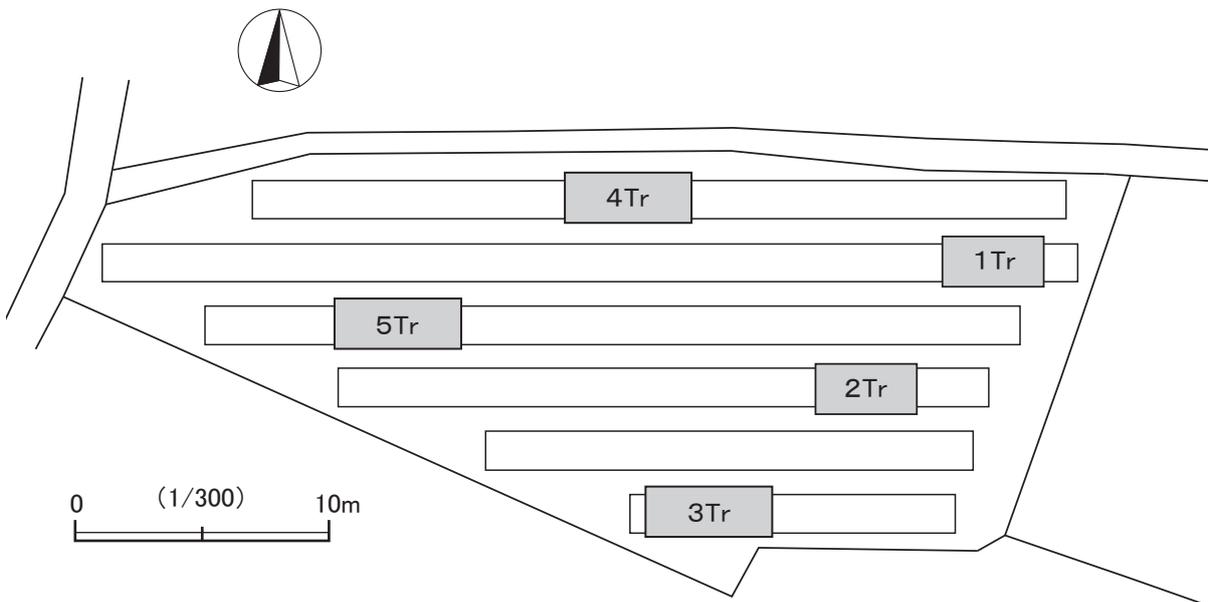
対象地は仙台平野において顕著に発達する浜堤のうち、第Ⅲ浜堤列上に位置している。周辺ではこれまで、岩沼市の復興事業である排水機場建設に伴う高大瀬遺跡の調査で、堤間湿地内より東日本大震災の津波堆積物のほか、慶長津波、貞観地震による津波の可能性のある堆積物が発見されている。またメガソーラー敷設工事に伴ういら塚遺跡の調査では遺構・遺物は未発見であるが、周辺では過去に製塩土器片が表採されている。

平成30年5月31日に太陽光発電設備建設に関する協議書が提出された。提出された工法は、ソーラーパネル設置の際にスクリュー杭を打ち込むもので掘削を伴わないが、遺構・遺物が存在した場合に遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は平成30年7月25日に開始した。対象とする面積は3,339㎡と広いので、太陽光発電設備の設置予定範囲内に5か所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無などの把握に努めた。以下に各トレンチの調査概要を記す。



第17図 いら塚遺跡位置図



第18図 いら塚トレンチ位置図

1トレンチ

1トレンチは、東西4m、南北2mの規模で設定した。東日本大震災による津波堆積物上面から20cm下で検出した、第Ⅲ浜堤 a 列形成砂である褐色微粒砂上面で精査を実施し、たが、遺構・遺物は発見されていない。

2トレンチ

2トレンチは、東西4m、南北2mの規模で設定した。東日本大震災による津波堆積物上面から50cm下で検出した、第Ⅲ浜堤 a 列形成砂である褐色微粒砂上面で精査を実施したが、遺構・遺物は発見されて



1トレンチ（東から）



3トレンチ（東から）



1トレンチ土層（南から）



5トレンチ土層（南から）

いない。

3トレンチ

3トレンチは、東西5m、南北2mの規模で設定した。東日本大震災による津波堆積物上面から50cm下で検出した、第Ⅲ浜堤a列形成砂である褐色微粒砂上面で精査を実施したが、遺構・遺物は発見されていない。

4トレンチ

4トレンチは、東西5m、南北2mの規模で設定した。東日本大震災による津波堆積物上面から35cm下で検出した、第Ⅲ浜堤a列形成砂である褐色微粒砂上面で精査を実施したが、遺構・遺物は発見されていない。

5トレンチ

5トレンチは、東西5m、南北2mの規模で設定した。東日本大震災による津波堆積物上面から40cm下で検出した、第Ⅲ浜堤a列形成砂である褐色微粒砂上面で精査を実施し、西側の一部で現代攪乱を認められたが、遺構・遺物は発見されていない。

以上の結果から各トレンチ北壁において土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

4. 長塚遺跡（第4地点）

4. 長塚遺跡（第4地点）

対象地は長塚遺跡内に位置する。遺跡は岩沼市北部に存在する長岡丘陵上に占地し、地表面の表採資料として弥生土器や土師器の散布が認められている。市史編纂事業に伴う調査を対象地西側に存在する谷地形の対岸まで実施しているが、そこでは古墳時代前期の竪穴建物跡が確認されており、該期の集落は今回の対象地付近までさらに展開している可能性が考えられる。

平成30年8月31日に太陽光発電事業に関する協議書が提出された。提出された工法は、ソーラーパネル設置の際に現地表面下2.0mまでスクリーを打ち込む工事を行うとあるが、近隣で実施した発掘調査では現地表面から20～40cm下で遺構が確認できる状況であり、これらの成果を踏まえると遺構・遺物が存在した場合、遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は平成30年10月10日に開始した。対象とする面積は533㎡であることから、設備の設置予定範囲内に5か所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無などの把握に努めた。以下に各トレンチの調査概要を記す。

1トレンチ

1トレンチは、東西5m、南北1mの規模で設定した。厚さ15cmの耕作土であるⅠ層、厚さ40cmで拳大の凝灰岩塊をやや多く含む褐色ローム質土のⅡ層、そしてその直下で丘陵を形成する灰黄色凝灰岩層であるⅢ層を確認している。耕作土を除去したⅡ層上面で遺構精査を実施し、さらにⅢ層上面で再度遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されていない。

2トレンチ

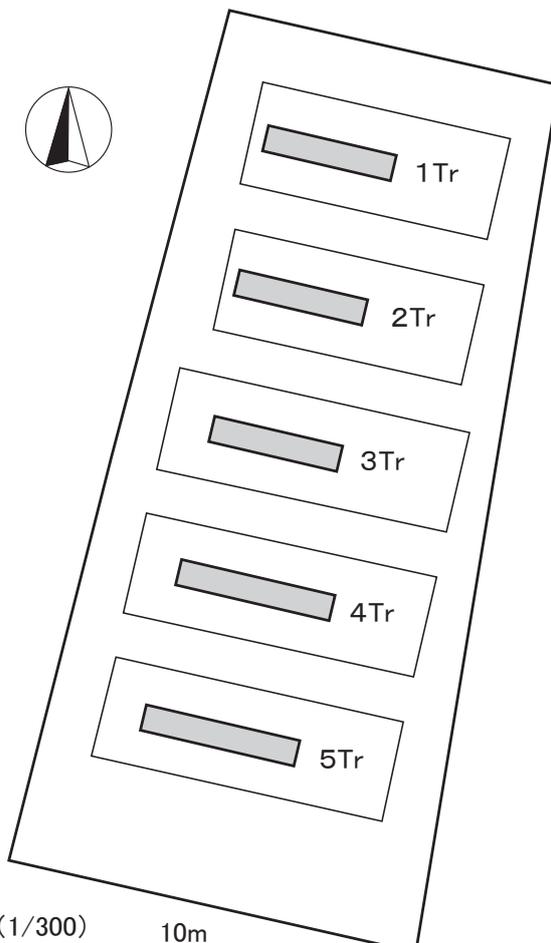
2トレンチは、東西5m、南北1mの規模で設定した。厚さ30cmのⅠ層、厚さ30cmのⅡ層、そしてその直下でⅢ層を確認している。Ⅱ層上面とⅢ層上面で遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されていない。

3トレンチ

3トレンチは、東西5m、南北1mの規模で設定した。厚さ30cmのⅠ層、厚さ70cmのⅡ層、そしてその直



第19図 長塚遺跡位置図



第20図 長塚トレンチ位置図

4. 長塚遺跡（第4地点）

下でⅢ層を確認している。Ⅱ層上面で遺構精査を実施したところ、西側にⅡ層が傾斜していることを確認した。さらにⅢ層上面で再度遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されていない。

4トレンチ

4トレンチは、東西6m、南北1mの規模で設定した。厚さ15cmのⅠ層、厚さ60cmのⅡ層、そしてその直下でⅢ層を確認している。Ⅱ層上面で遺構精査を実施したところ、西側にⅡ層が傾斜していることを確認した。さらにⅢ層上面で再度遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されていない。

5トレンチ

5トレンチは、東西6m、南北1mの規模で設定した。厚さ15cmのⅠ層、厚さ70cmのⅡ層、そしてその直下でⅢ層を確認している。Ⅲ層上面での精査では、東側から西側へかけてⅢ層が傾斜していることを確認した。遺構・遺物は発見されていない。

以上の結果から、現況では平坦な地形となっていたものの、本来は西側の谷地形にかけての緩斜面であった箇所を大きく改変していたことが明らかとなった。このため、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



1トレンチ（南西から）



2トレンチ土層（南から）



4トレンチ（南西から）



5トレンチ（南西から）

5. 丸山遺跡（第7地点）

5. 丸山遺跡（第7地点）

対象地は丸山遺跡内に位置する。地質学的には自然堤防、もしくは浜堤上に立地する。遺跡内では平成20・21年度に発掘調査が実施されているほか、個人住宅新築工事に際して確認調査等が数地点で実施され、これまでに中世の遺構・遺物、近世の屋敷地割に関連する溝跡・井戸跡などの遺構のほか、16～19世紀後半にかけての遺物が出土している。なお、対象地は『岩沼城絵図』（仙台市博物館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、「下中屋敷」として描かれている。

平成30年5月9日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表下約2mの柱状改良工事を行うとされており、近隣で実施した発掘調査では現地表面から60～80cm下で遺構が確認できる状況を踏まえると、提出された工法では遺構・遺物が存在した場合に遺跡へ与える影響は大きいことが想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することになった。

調査は平成30年5月25日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西2m、南北3mのトレンチを設定し、重機を用いて現地表下70cmで確認されたⅢ層上面までを掘削し、その後に人力でⅣ層上面まで掘り下げた。確認できた土層は以下のとおりである。

- I層 表土。既存住宅建築時の盛土。厚さ40cm。
- II層 黒褐色シルト（10YR2/2）厚さ20cm。
- III層 黒褐色シルト（10YR3/2）厚さ10cm。
- IV層 褐灰色シルト（10YR4/1）遺構確認面。
- V層 褐色粘質シルト（10YR4/4）厚さ10cm。

調査ではIV層上面で遺構精査を実施し、北東隅でⅢ層を掘り込む土坑1基を確認した。

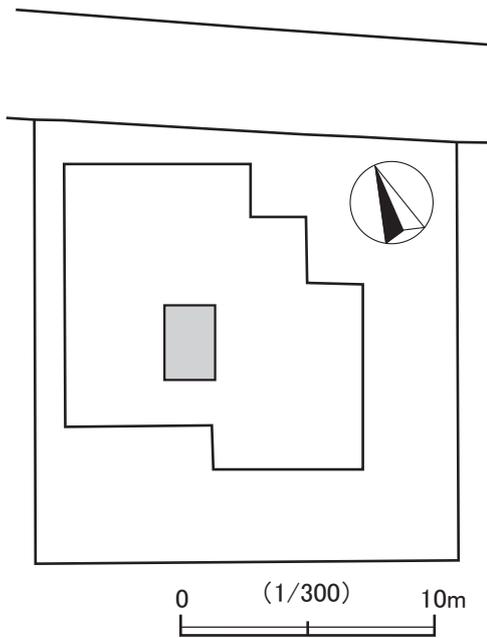
SK01 南北1.0m、東西0.6mの範囲を検出する。深さは0.3mで堆積土は黒褐色シルト・褐灰色シルトなど3層に分層でき、すべて人為的埋土である。遺物は出土していない。

このほか、遺物は表土、及びII層中から近現代陶磁器の小片がごく少量出土している。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



第21図 丸山遺跡位置図



第22図 丸山トレンチ位置図



全景（南から）

6. 竹駒神社境内遺跡（第3地点）

6. 竹駒神社境内遺跡（第3地点）

対象地は竹駒神社境内遺跡に南隣する。地質学的には自然堤防、もしくは浜堤上に立地する。周辺では平成19年度に竹駒神社向唐門解体修復工事に伴い発掘調査が実施され、近世段階の社寺境内を構成する参道や建物などの遺構のほか、中世陶器を包含する溝跡、古代遺物が出土している。また神社裏手には二木横穴墓群が展開している。

平成30年4月25日に竹駒神社の境内に隣接する箇所において、店舗付住宅新築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表下175cmほどまで柱状改良工事を行うとされていたが、対象地は『岩沼城絵図』（仙台市博物館所蔵）など現存する幾多の古絵図から近世段階においては境内域、あるいは竹駒神社参道で形成された門前町に含まれている可能性が考慮された。また前述のとおり神社境内内での調査では中世期の遺構・遺物が存在し、さらに古墳時代には横穴墓群が構築されるなど、古くから土地利用が行われていた可能性も推定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することになった。

調査は平成30年5月8日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西2m、南北4mのトレンチを設定し、重機を用いて現地表下60cmで確認されたIV層上面までを掘削した。確認できた土層は以下のとおりである。

- I層 表土。既存住宅建築時の盛土。厚さ30cm。
- II層 暗褐色シルト（10YR3/3）厚さ10cm。
- III層 黒褐色シルト（10YR2/2）厚さ20cm。
- IV層 褐色粘質シルト（10YR4/4）遺構確認面。

調査ではIV層上面で遺構精査を実施したが、遺構は確認できなかった。遺物は表土、及びII層中から近現代陶磁器の小片がごく少量出土している。

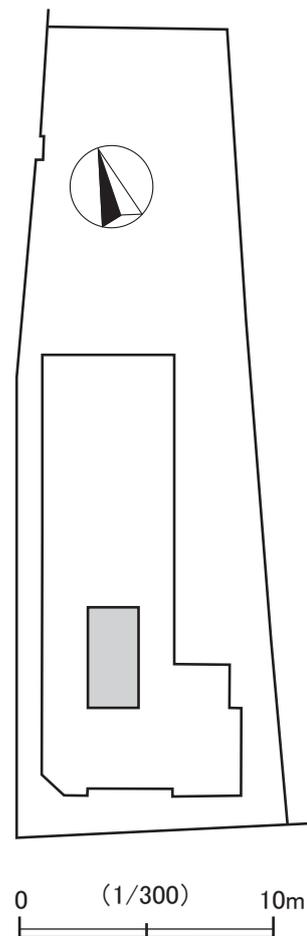
以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



全景（南から）



第23図 竹駒神社境内遺跡位置図



第24図 トレンチ配置図

7. 新館跡前遺跡（第3地点）

7. 新館跡前遺跡（第3地点）

対象地は新館跡前遺跡内に位置する。地質学的には岩沼西部丘陵から東側へ派生した尾根斜面に立地する。対象地周辺では、平成12・16・24・25年に宅地造成及び個人住宅建築に伴い工事立会を実施しており、遺構は未発見であるが少量の縄文土器が宅地造成時に出土している。

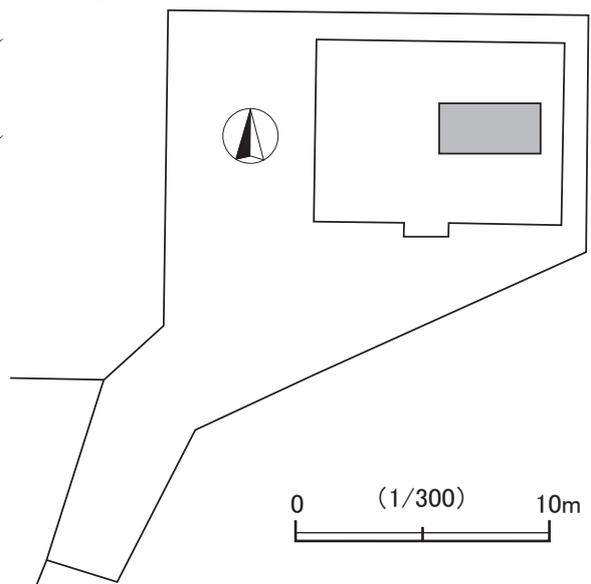
平成30年3月17日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は現地地表下2.0～5.0mの鋼管杭工事を行うとあり、遺構・遺物が存在した場合に遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は平成30年4月12日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西4m、南北2mのトレンチを設定し、重機を用いて現地地表下130cmまで掘削した。しかしながら、確認できた土層はすべて宅地造成時の盛土である。また遺物は出土していない。

以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



第25図 新館跡前遺跡位置図



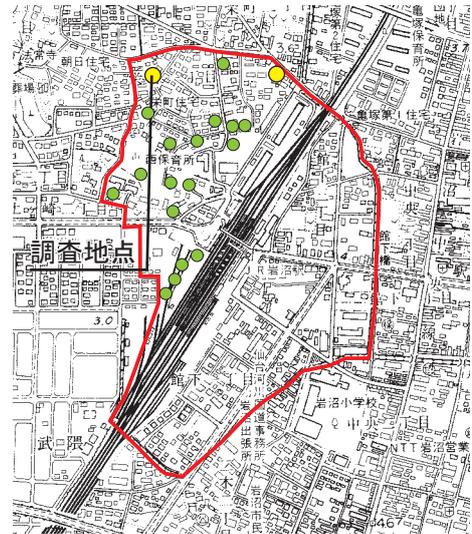
第26図 新館跡前トレンチ位置図



土層断面（南から）

8. 鶺鴒ヶ崎城跡 (第19地点)

対象地は鶺鴒ヶ崎城跡内に位置する。地質学的には二木・朝日丘陵から北側へ派生した尾根上、もしくは丘陵斜面に立地する。対象地周辺では平成16年に3地点で発掘調査が実施されているほか、東北福祉大学による調査が平成13～27年(2001～2015)にかけて実施され、これまでに中世の遺構・遺物、近世の区画溝等などの遺構のほか、17～19世紀後半にかけての遺物が出土している。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館并館下絵図』(宮城県図書館所蔵)など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、「下中屋敷」として描かれている。



第27図 鶺鴒ヶ崎城跡位置図

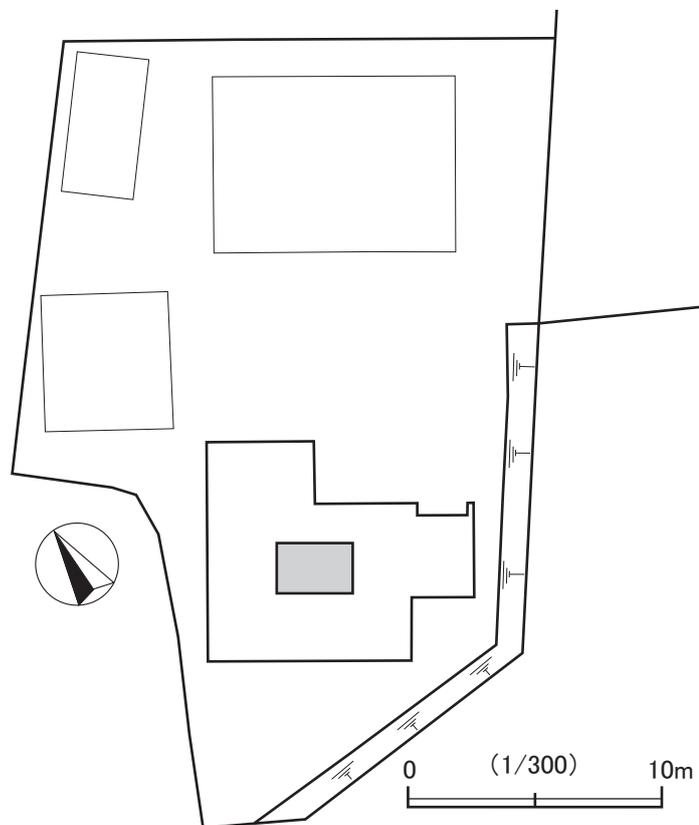
平成30年8月30日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表面下2.0～5.0mの鋼管杭工事を行うとあるが、近隣で実施した発掘調査では現地表面から20～40cm下で遺構が確認できる状況であり、これらの成果を踏まえると遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は平成30年10月4日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西2m、南北3mのトレンチを設定し、重機を用いて現地表面下65cmで確認されたIV層上面までを掘削した。確認できた土層は以下のとおりである。

- I層 表土。耕作土。厚さ25cm。
- II層 暗褐色シルト(10YR3/3) 厚さ20cm。耕作土。
- III層 褐色灰色シルト(10YR4/1) 厚さ15cm。褐色ローム質土ブロックをごく少量含む。
- IV層 褐色ローム質土(10YR4/4) 丘陵形成層。

調査ではIV層上面で遺構精査を実施したが、遺構は確認できなかった。また遺物は出土していない。

以上の結果から土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



第28図 鶺鴒ヶ崎城跡トレンチ位置図

【引用・参考文献】

- 池上悟 2000 『日本の横穴墓』雄山閣
- 岩沼市史編纂委員会 1984 『岩沼市史』岩沼市
- 岩沼市教育委員会 2000 『引込横穴墓群』岩沼市文化財調査報告書第1集
- 岩沼市教育委員会 2004a 『下野郷館跡』岩沼市文化財調査報告書第2集
- 岩沼市教育委員会 2004b 『鶴ヶ崎城跡・第2地点』岩沼市文化財調査報告書第3集
- 岩沼市教育委員会 2004c 『鶴ヶ崎城跡・第3地点』岩沼市文化財調査報告書第4集
- 岩沼市教育委員会 2005 『鶴ヶ崎城跡・第4地点』岩沼市文化財調査報告書第6集
- 岩沼市教育委員会 2009 『竹駒神社境内遺跡』岩沼市文化財調査報告書第8集
- 岩沼市教育委員会 2010 『丸山遺跡』岩沼市文化財調査報告書第9集
- 岩沼市教育委員会 2011 『西須賀原遺跡』岩沼市文化財調査報告書第10集
- 岩沼市教育委員会 2012 『上根崎遺跡』岩沼市文化財調査報告書第11集
- 岩沼市教育委員会 2016a 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』岩沼市文化財調査報告書第14集
- 岩沼市教育委員会 2016b 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』岩沼市文化財調査報告書第15集
- 岩沼市教育委員会 2016c 『高大瀬遺跡・にら塚遺跡』岩沼市文化財調査報告書第16集
- 岩沼市教育委員会 2017a 「岩沼市・原遺跡の調査概要」『第43回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 岩沼市教育委員会 2017b 『貞山堀発掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第17集
- 岩沼市教育委員会 2017c 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』岩沼市文化財調査報告書第18集
- 岩沼市教育委員会 2018 a 『原遺跡第2次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第19集
- 岩沼市教育委員会 2018 b 『下野郷館跡』岩沼市文化財調査報告書第20集
- 岩沼市教育委員会 2018 c 「岩沼市・原遺跡第3次調査の概要」『平成30年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
- 岩沼市教育委員会 2019 『原遺跡第3次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第21集
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第4巻 資料編Ⅰ 考古
- 岩沼市史編纂委員会 2018 『岩沼市史』第1巻 通史編Ⅰ 原始・古代・中世
- 大崎市 2009 『岩出山町史 通史編・上巻』岩出山町史編さん委員会
- 大田区立郷土博物館 2006 『横穴墓のなぞ』
- 鍛冶一郎・佐藤宏一他 1962 「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」『東北考古学』第3号
- 高橋守克 1971 「宮城県玉造郡岩出山町川北横穴墓群B地区発掘調査報告(第3次)」『宮教考古』第2号 宮城教育大学考古学研究会
- 東北福祉大学吉井ゼミナール 2011 『鶴ヶ崎城跡(岩沼要害)第10次発掘調査報告書』
- 百々千鶴 2010 「宮城県の横穴墓についての基礎的研究」『北杜-辻秀人先生還暦記念論集-』
- 百々千鶴・佐藤敏幸・古川一明 2010 「宮城県の横穴墓と古墳」『第15回東北・関東前方後円墳研究会大会 横穴墓と古墳 発表要旨資料』
- 宮城県教育委員会 1977 「長谷寺横穴墓群」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』宮城県文化財調査報告書第48集
- 宮城県教育委員会 1993 『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第159集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1984 多賀城跡』

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	1							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編集者名	川又隆央・武田裕光・太田昭夫							
編集機関	岩沼市教育委員会							
所在地	〒989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223)-22-1111							
発行年月日	西暦2019年3月31日							
しよゆういせき 所収遺跡	しよざいち 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
びやうどうやまよこあなぼぐん 平等山横穴墓群	いわぬましきたはせあざ 岩沼市北長谷字 はたまつざき 畑松崎	42111	15016	38.06.38	140.50.40	2018.11.27 ～ 2019.02.10	60㎡	宅地造成
うがさきじょうあと 鶺鴒ヶ崎城跡	いわぬましきかえちやういつちやうめ 岩沼市栄町一丁目	42111	15023	38.06.56	140.51.54	2018.08.28	8㎡	個人住宅
つかいせき にら塚遺跡	いわぬまししものごうあざ 岩沼市下野郷字 さんになやち 三人谷地	42111	15043	38.07.06	140.55.23	2018.07.25	46㎡	太陽光 発電施設
ちやうづかいせき 長塚遺跡	いわぬましないろよしあざ 岩沼市三色吉字 すぎのうち 杉ノ内	42111	15067	38.07.33	140.55.59	2018.10.10	27㎡	太陽光 発電施設
まるやまいせき 丸山遺跡	いわぬましおおてまち 岩沼市大手町	42111	15055	38.06.29	140.51.55	2018.05.25	6㎡	個人住宅
たけこまじんじやけいだいせき 竹駒神社境内遺跡	いわぬましいなりまち 岩沼市稲荷町	42111	15056	38.06.17	140.51.51	2018.05.08	8㎡	店舗兼 住宅
しんたてあたまえいせき 新館跡前遺跡	いわぬましきたはせあざ 岩沼市北長谷字 はたてじやうにし 畑堤上西	42111	15044	38.06.15	140.51.21	2018.04.12	8㎡	個人住宅
うがさきじょうあと 鶺鴒ヶ崎城跡	いわぬましきかえちやういつちやうめ 岩沼市栄町一丁目	42111	15023	38.06.55	140.51.43	2018.10.04	6㎡	個人住宅
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
平等山横穴墓群	古墳	古墳後		横穴墓	須恵器 土師器 金属製品 玉製品	南西から南側斜面で3基の横穴墓 を確認し、うち2基を調査。		
鶺鴒ヶ崎城跡	集落跡・城館	縄文・弥生・中世 ・近世		土坑	なし			
にら塚遺跡	生産遺跡・集落跡	古墳・古代		なし	なし			
長塚遺跡	集落跡	縄文・古墳		なし	なし			
丸山遺跡	集落跡	中世・近世		なし	なし			
竹駒神社境内遺跡	社寺	中世・近世		なし	なし			
新館跡前遺跡	散布地	縄文・古代		なし	なし			
鶺鴒ヶ崎城跡	集落跡・城館	縄文・弥生・中世 ・近世		なし	なし			
要約	<p>平等山横穴墓群は、岩沼西部丘陵から東へ派生する二木・朝日丘陵の南側斜面に展開する。本横穴墓群ではこれまでに3基が開口していることが確認されており、今回は1・3号墓の調査を実施した。1号墓・3号墓とも、平面形状は方形で、玄室の立面形態はドーム形を呈する。玄室内の付帯施設としては台床があり、1号墓では無縁台床が左右に、3号墓では有縁台床が右側壁に接して造られている。このような構造上の特徴は、市内に分布する横穴墓群の主要な傾向と合致する。既開口の横穴墓であったため、調査した2基の横穴墓からの遺物の出土は決して多くはないが、1号墓からはほぼ原位置を保っていると思われる須恵器塚が出土したほか、玄室内及び玄門付近を中心として金銅製耳環、刀の鞘尻、玉製品なども出土している。出土遺物から本横穴墓群の機能時期は7世紀後半頃を中心とすると思われる。</p> <p>鶺鴒ヶ崎城跡(第18地点)の調査では、土坑3基を確認し、うち1基では強い被熱を受けていたことが判明した。</p>							

岩沼市文化財調査報告書第 22 集
市内遺跡発掘調査報告書 1

平成 31 年 3 月
発行 岩沼市教育委員会
岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号
生涯学習課 TEL0223(23)1111 内線 573
印刷 株式会社 国井印刷
岩沼市藤浪一丁目 4-35
TEL0223(22)2221